

## セグメント7

全身的な変化／人の一生

2014 年 4 月 7 日～ 2014 年 7 月 18 日

# I 学 習 内 容

セグメント7は「臓器・器官系の構造と機能の正常と異常」の最終段階に当たり、臓器系をまたいで起こる「全身的な変化」、出産・成長・発育・成熟・加齢・臨終といった「人の一生」を基本テーマとし、基幹科目としては「血液・リンパ系」、「感染症系」、「免疫・アレルギー・膠原病」、「妊娠と分娩」、「新生児・小児・思春期」、「加齢と老化・臨終」の6教科よりなっている。4年前期で臓器別講義は終了し、後期以降は医療を取り巻く環境や5年の臨床実習に向けた臨床入門を学ぶことになる。医学的知識の習得はもとより基本的臨床技能や臨床的思考力を養っていかなければならない。

東京女子医科大学における医学教育はチュートリアルを柱としており、セグメント7でも5課題のチュートリアルを学習する予定となっている。5年生から始まる臨床実習に向け、自己学習・自己開発の能力を高め、臨床推論や画像の理解など医学知識以外の能力も一層磨く必要がある。

約3ヵ月という短い期間であるが、学習要項に沿って計画的な自己学習・自己開発を進め、チーム医療を行う臨床実習に向け準備を怠らないように日々努力してください。

## Ⅱ 到達目標

### A. 包括的到達目標

I 血液・造血器の正常構造と機能について説明することができる。

- 1) 骨髄、胸腺、リンパ節、脾臓、およびその他のリンパ組織の構造と機能
- 2) 血球の産生・崩壊、形態と機能
- 3) 止血機能
- 4) 血漿とその成分
- 5) 血液型と個人識別

Ⅱ 血液・造血器の異常についてその主要症候、病態生理、病因、診断、検査および治療について述べる  
ことができる。

- 1) 赤血球、白血球、血小板の異常
- 2) リンパ球、組織球の異常
- 3) 血漿蛋白異常
- 4) 出血傾向
- 5) 輸血副作用

Ⅲ 感染症の現状、動向そして予防対策について説明することができる。

- 1) 主な感染症の疫学
- 2) 感染対策と予防接種
- 3) 感染症サーベイランス

Ⅳ 主たる感染症についてその主要症候、病態生理、病因、診断、検査および治療について述べる  
ことができる。

- 1) 感染炎症、感染免疫
- 2) 微生物学的検査
- 3) ウイルス感染症
- 4) クラミジア、マイコプラズマ、リケッチア感染症
- 5) 細菌感染症
- 6) 真菌感染症
- 7) 寄生虫感染症
- 8) 熱帯感染症

V 免疫系組織の正常構造と機能について説明することができる。

- 1) 免疫系の一般特性
- 2) 自己と非自己の識別
- 3) 免疫反応の調節機構
- 4) 疾患と免疫

VI 免疫系に関連した疾患についてその主要症候、病態生理、病因、診断、検査および治療について述べることができる。

- 1) 膠原病および膠原病類縁疾患
- 2) アレルギー性疾患
- 3) 免疫不全症

VII 妊娠と分娩の正常経過と転帰について説明することができる

- 1) 妊娠
- 2) 分娩
- 3) 産褥

VIII 発生および出生前から思春期に至る小児の成長・発達について、理解し説明することができる。

- 1) 胎児
- 2) 新生児
- 3) 小児（乳児・幼児・学童）の成長・発達
- 4) 思春期・青年期における身体成長・発達と精神発達

IX 細胞・臓器の加齢現象と加齢による臓器・機能の変化、高齢者に特有の疾患の特徴について説明することができる。

- 1) 細胞数の減少、組織の萎縮
- 2) 細胞の老化、組織の機能低下
- 3) 加齢による臓器の構造と機能の変化
- 4) 予備力の低下、高齢者に特有な疾患
- 5) 老年症候群（誤嚥、転倒、失禁、褥瘡）
- 6) 高齢者の感情・意欲・性格の変化

X 高齢者を診療する上での基本的な技能・態度、治療について説明することができる。

- 1) 多疾患合併、非定型的症状
- 2) 高齢者総合機能評価（CGA）
- 3) 検査値の加齢変化
- 4) リハビリテーション
- 5) 高齢者の食事・栄養療法

6) 高齢者の薬物療法

XI 高齢者の生活支援の要点、急速な高齢化に対応する社会の仕組み、末期医療、死について説明することができる。

- 1) 高齢者の疫学と医療対策
- 2) 在宅介護、在宅医療
- 3) 保健・医療・福祉・介護関連法規
- 4) 余命への配慮
- 5) 緩和ケア、ホスピス
- 6) 終末期ケア、看取り

## B. 科目別到達目標

(★=人間教育關係)

# 基幹科目

## [血液・リンパ系]

科目責任者：田中 淳司（血液内科学）

骨髄、胸腺、リンパ節、脾臓の形態と機能について学習する。また赤血球、白血球、血小板などの産生と崩壊とその調節について学習し、それらと病的状態についてどのように把握するかを学ぶ。

さらに血液学的検査などの各種検査法を学ぶと共に、化学療法、輸血療法、免疫療法、放射線療法について学習し血液疾患の病態把握とその治療についての知識を学習する。

（評価方法）

筆記試験、実習レポート

[総論]

大項目	中項目	小項目	備考
I. 血液・造血器の正常構造と機能	1. 骨髄、胸腺、リンパ節、脾臓の構造と機能 2. 血球の産生・崩壊とその調節 3. 赤血球の形態と機能 4. 白血球の形態と機能 5. 髄外造血 6. 鉄と造血ビタミンの代謝 7. 止血機能と血管壁、血小板、凝固・線溶系 8. 血漿とその成分		
II. 主要症候とその病態生理			
A. 血液、造血器	1. 貧血 2. 赤血球増加 3. 白血球増加 4. 白血球減少 5. 好酸球増加 6. 好塩基球増加		

大項目	中項目	小項目	備考	
III. 診察、診断 A. 全身の身体診察法と精神状態の把握  B. 検査 1 検体検査    2 超音波検査 3 エックス線検査 4 エックス線CT検査 5 磁気共鳴画像(MRI)検査 6 核医学検査  C. 治療 1 治療の基礎	7. 血小板増加 8. 血小板減少 9. 出血傾向 10. 血栓傾向 11. 過粘稠度 (hyperviscosity) 症候群 12. 易感染症 13. 免疫グロブリン異常			
	1. リンパ節 2. 肝、脾			
	1. 血液学検査			1) 血算 2) 止血機能 3) 造血能 4) 溶血に関する検査 5) 血液型・輸血関連検査
	2. 病理・組織学検査			1) 細胞疹 2) 染色体検査 3) 遺伝子検査
	1. 単純撮影			
	1. シンチグラム (SPECT、PET) 2. 体外測定・試料検査			1) 動態検査 2) 摂取率 3) 吸収・排泄率 4) 血球寿命
	1. 治療に用いる機器・器材と安全な取り扱い法			1) 無菌室

大項目	中項目	小項目	備考
2 薬物療法			
3 輸血療法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 安全性確保</li> <li>2. 適応、禁忌</li> <li>3. 副作用とその対策</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 血液製剤適正使用基準 (新鮮凍結血漿、アルブミン製剤、赤血球濃厚液、血小板)</li> <li>1) 免疫学的副作用</li> <li>2) 輸血感染症</li> </ol>	
4 血液浄化	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 血漿交換</li> </ol>		
5 消化管・腹部の手術	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 脾の手術</li> </ol>		
6 臓器・組織移植	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 主な移植の種類と適応</li> <li>2. 提供者 (donor) と被移植者 (recipient)</li> <li>3. 移植と免疫</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 骨髄</li> <li>1) 自家・同種移植</li> <li>2) 組織適合性 3) 拒絶反応</li> <li>1) 免疫抑制 2) 無菌室治療</li> </ol>	
7 放射線治療	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 放射線治療の適応</li> <li>2. 集学的治療</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 根治的照射 2) 姑息的照射</li> <li>3) 対症的照射</li> <li>1) 手術療法との併用</li> <li>2) 化学療法との併用</li> <li>3) 分子標的薬剤との併用</li> <li>4) 免疫療法との併用</li> </ol>	
8 放射免疫療法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 適応疾患と放射性薬剤</li> </ol>		

[各 論]

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
I. 赤血球系疾患	1. 鉄欠乏性貧血 2. 二次性（症候性）貧血 3. 鉄芽球性貧血 4. 巨赤芽球性貧血 5. 異常ヘモグロビン症 6. サラセミア 7. 遺伝性球状赤血球症 8. 発作性夜間ヘモグロビン尿症 9. 赤血球破碎症候群 10. 赤血球酵素異常症 11. 自己免疫性溶血性貧血 △ 12. 抗体によるその他の溶血性貧血 13. 薬剤による溶血性貧血 14. 再生不良性貧血 15. 赤芽球癆 16. 骨髄異形成症候群（MDS） 17. 出血性貧血 18. メトヘモグロビン血症 19. 脾機能亢進症	1) Fanconi 貧血 1) Diamond-Blackfan 症候群	
II. 白血球系疾患とその他の骨髄増殖性疾患	1. 無顆粒球症 2. 白血球機能異常症 3. 伝染性単核（球）症 4. 急性白血病 5. 慢性骨髄性白血病 6. 慢性リンパ性白血病 7. 成人 T 細胞白血病 8. 骨髄線維症 9. 真性赤血球増加症 10. 二次性赤血球増加症 11. 本態性血小板血症 12. 二次性血小板増加症 13. 同種造血幹細胞移植	1) Philadelphia 染色体 1) 若年性骨髄単球性白血病 1) hairy cell leukemia 1) 骨髄移植 2) 臍帯血移植	

大項目	中項目	小項目	備考
Ⅲ. リンパ増殖性疾患 と類緑疾患	1. 悪性リンパ腫		
	2. Hodgkin リンパ腫		
	3. 非Hodgkin リンパ腫	1) Burkitt リンパ腫	
	4. 血管免疫芽球性T細胞リンパ腫		
	5. 皮膚T細胞リンパ腫	1) 菌状息肉病	
	6. 多発性骨髄腫	1) Bence Jones 蛋白	
	7. マクログロブリン血症		
	△ 8. monoclonal gammopathy of undetermined significance (MGUS)		
	△ 9. アミロイドーシス		
	△ 10. 組織球増殖症	1) Langerhans 細胞組織球症 (histiocytosis X)	
	11. 血球貧食症候群 (hemophagocytic syndrome) (hemophagocytic lymphohistiocytosis)		
	12. 自家造血幹細胞移植		
Ⅳ. 出血性疾患と 血栓傾向	1. 特発性血小板減少性紫斑病 (ITP)		
	2. 二次性血小板減少症		
	3. 血栓性血小板減少性紫斑病 (TTP)		
	△ 4. 溶血性尿毒症症候群 (HUS)		
	5. 先天性血小板機能異常症	1) Glanzmann 病、 Bernard-Soulier 症候群	
	6. 後天性血小板機能異常症		
	7. 血友病		
	8. von Willebrand 病		
	△ 9. 循環抗凝固因子による出血傾向		
	10. 播種性血管内凝固症候群 (DIC)		
	11. ビタミンK 欠乏症		
	△ 12. 新生児出血性疾患		
	△ 13. アレルギー性 (血管性) 紫斑病	1) Schönlein-Henoch 紫斑病	
	14. 先天性血栓性素因		

△：卒業時までの到達目標

[血液・リンパ系]  
 <血液内科学関係>

溝口秀昭	イラスト血液内科 (第2版)	文光堂	2004
溝口秀昭	血液内科診療ハンドブック (第2版)	南江堂	2005
小澤敬也 他編	講義録 血液・造血器疾患学	メジカルビュー社	2008
宮内 潤、 泉二登志子	骨髄疾患診断アトラス 血球形態と骨髄疾患	中外医学社	2010
浅野茂隆 他監修	三輪血液病学 (第3版)	文光堂	2006
Hoffbrand AV et al	Essential Haematology (6th ed)	Blackwell	2011
Kaushansky K et al	Williams Hematology (8th ed)	McGraw-Hill	2010
Greer JP et al	Wintrobe's Clinical Hematology (13th ed)	Lippincott Williams&Wilkins	2013

<生理学関係>

星 猛 他訳	医科 生理学展望 原書 19 版	丸善	2000
小幡邦彦 他編	新生理学	文光堂	1994
古河太郎 他編	現代の生理学 第3版	金原出版	1994
本郷利憲 他編	標準生理学 第6版	医学書院	2005
中島一郎 他編	新生理学体系 15 血液の生理学	医学書院	1990

<解剖学・発生生物学関係>

小川和朗・溝口史郎	組織学 (第2版)	文光堂	1993
藤田尚男・藤田恒夫	標準組織学総論 (第4版)	医学書院	2002

藤田尚男・藤田恒夫	標準組織学各論（第4版）	医学書院	2010
Gartner L. P. & Hiatt J. L. （石村、井上監訳）	最新カラー組織学（原書2版）	西村書店	2003
Ross. M. H. 他	Histology : A text and atlas (4th ed.)	Lippincott W. & W.	2003
Fawcett. D. W.	A Textbook of Histology (12th ed)	Chapman & Hall	1994
溝口史郎	図説組織学（第2版）	金原出版	1987
"Welsh, U." （岡本道雄他訳）	Sobotta/Hammemersen 実習人体組織学図譜（第4版）	医学書院	1995
<病理学関係>			
Kumar ら	Robins Pathologic basis of disease （8版）	SAUNDERS ELSEVIER	2010
Swerdlow ら	Tumours of haematopoietic and lymphoid tissues	WHO	2008
Ferry & Harris	Atlas of lymphoid hyperplasia and lymphoma	Saunders	1997
Ioachim	Lymph node pathology	Lippincott W. & W.	2008
菊地昌弘、森 茂郎	最新・悪性リンパ腫アトラス	文光堂	2004
菊地昌弘、監修	リンパ節病変 （病理と臨床 12巻 臨時増刊号）	文光堂	1994
<法医学関係>			
田中宣幸 他	学生のための法医学 改訂6版	南山堂	2006
霜山竜志 編集	輸血ハンドブック 第2版	医学書院	2002

金沢琢雄	実践 医事法学	金原出版	2008
<生化学関係>			
清水孝雄 監訳	ハーパー生化学 (原書 29 版)	丸善	2013
浅野茂隆 他監修	三輪血液病学	文光堂	2006
三輪史朗 監修	赤血球	医学書院	1998
<薬理学関係>			
Goodman and Gilman	Pharmacological Basis of Therapeutics	McGraw-Hill	2006
山本 雅/ 仙波憲太郎 編	癌化のシグナルがわかる	羊土社	2005
竹縄忠臣 編	タンパク質科学イラストレイテッド	羊土社	2005
遠藤 仁 他編	医系薬理学	中外医学社	2005
遠藤政夫 他編	医科薬理学	南山堂	2005
<輸血学関係>			
Molison PL et al	Blood Transfusion in Clinical Medicine (11th ed)	Blackwell Publishing	2005
浅野茂隆 他編	三輪血液病学 (第 3 版)	文光堂	2006
遠山 博 他編	輸血学 (改訂第 3 版)	中外医学社	2004
大戸 斉、遠山 博	小児輸血学	中外医学社	2006
<放射線医学関係>			
Cox and Ang	Radiation Oncology (第 9 版)	Mosby	2009
大西 洋 他編	癌・放射線療法	篠原出版新社	2010
平岡真寛 他編	放射線治療マニュアル	中外医学社	2006

久田欣一 監修	最新臨床核医学 (第3版)	金原出版	1999
三橋紀夫	がんをどう考えるか 放射線治療医からの提言	新潮新書	2009
Sandlen et al	Diagnostic Nuclear Medicine (第4版)	Williams & Wilkins	2002
日下部きよ子	がん診療のためのPET/CT 一読影までの完全ガイド	金原出版	2006
日本放射線腫瘍学会 編	放射線治療計画ガイドライン 2012年版	金原出版	2012
<小児科学関係>			
谷口 克、 宮坂昌之 編	標準免疫学 第3版	医学書院	2013
森川昭廣、 内山 聖 編	標準小児科学 第6版	医学書院	2006
大関武彦、近藤直美 監修	小児科学 第3版	医学書院	2008
	小児科 47巻1号 特集「原発性免疫不全症候群における 最近の知見」	金原出版	2006
Cassidy, Petty, Lindsley, Laxer	Textbook of Pediatric Rheumatology 5th edition	Elsevier	2005
堀部敬三	小児がん診療ハンドブック	医薬ジャーナル社	2011
赤塚順一、土田嘉昭、 藤本猛男、山崎洋次	小児がん	医薬ジャーナル社	2000
Philip A. Pizzo, David G. Poplack	Principle and Practice of Pediatric Oncology (6th edition)	Lippincott Williams & Wilkins	2010

## [感染症系]

科目責任者：菊池 賢（感染症科）

最近、新興・再興感染症や多剤耐性菌感染症が問題となっており、その対策・予防が重要になっている。セグメント7では種々の感染症の病態について理解するとともに感染症の症候・診断・治療・予防について学習する。感染症の発症には病原体の病原性と宿主の感染防御能が関係しており、まず、病原体についての知識と生体の感染防御能について学習することが重要である。病原体の感染経路についても病原体により種々の特徴があり、疫学を含めた学習が必要である。

(評価方法)

筆記試験

### [総論]

大項目	中項目	小項目	備考
I. 予防と健康管理 A. 感染症対策	1. 現状と動向	1) 感染症法 (1類、2類、3類、4類、5類感染症、指定感染症、新感染症) 2) 主な感染症の疫学と流行状況[届出を要する伝染病、検疫伝染病、国際伝染病、学校伝染病、感染症サーベイランス対象疾患、後天性免疫不全症候群 (AIDS)、B型肝炎、人畜共通感染症]	
	2. 予防対策	1) 感染源・感染経路対策 (消毒、滅菌、隔離、媒介動物駆除) 2) 主な感染症の予防、予防接種 3) 感染症サーベイランス	
II. 病因、病態 A. 炎症 B. 感染	1. 局所的変化	1) 組織反応 2) 症候	
	2. 全身的变化	1) 血液の変化 2) 代謝性反応	
	3. 急性炎症と慢性炎症		
B. 感染	1. 感染の概念	1) 病原微生物 2) 感染と発症 3) 感染経路 4) 感染と免疫・アレルギー	
	2. 宿主側の要因	1) 日和見感染 (opportunistic infection) 2) 二次感染、複数菌感染 3) 免疫不全症候群 4) compromised host 5) 菌交代症、菌交代現象	
	3. 垂直感染と水平感染	1) 子宮内感染、産道感染 2) TORCH症候群、B型肝炎ウイルス感染、後天性免疫不全症候群、成人T	

[各 論]

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
III. 検査 A. 検体検査  I. ウイルス感染症	4. 全身感染症 (外毒性疾患を含む)  5. 輸入感染症 6. 性(行為)感染症(STD) 7. 人獣共通感染症 8. 新興・再興感染症 9. 院内感染  1. 微生物学・寄生虫学検査	細胞白血病 1) 菌血症 2) 敗血症 3) エンドトキシンショック 4) toxic shock syndrome 5) toxic shock like syndrome  1) 術後感染  1) 染色法 2) 培養・同定法 (塗抹鏡検) 3) 抗菌薬の感受性テスト 4) 各病原体別検査(細菌、結核菌、梅毒 トレポネーマ、リケッチア、クラ ミジア、マイコプラズマ・ウイルス、 真菌、原虫、寄生虫)	
	1. 感冒(かぜ症候群) 2. インフルエンザ 3. アデノウイルス感染症 4. RSウイルス感染症 5. 流行性耳下腺炎(ムンプス) 6. 麻疹 7. 風疹 8. 突発性発疹 9. 急性灰白髄炎(ポリオ) 10. コクサッキーウイルス・ECHO 感染症 11. 流行性角結膜炎 12. 咽頭結膜熱 13. ウイルス性下痢症 14. 単純性ヘルペスウイルス 感染症 15. 水痘、帯状疱疹 16. 伝染性紅斑 17. サイトメガロウイルス 感染症 18. ウイルス性出血熱 19. ヒト乳頭腫ウイルス感 染症	1) Koplik 斑 1) 先天性風疹症候群  1) ヘルパンギナ、手足口病、急性出血 性結膜炎  1) ロタウイルス、ノロウイルス 1) 母子感染対策  1) 尋常性疣贅、青年性扁平疣贅、尖圭 コンジローム、	

大項目	中項目	小項目	備考
II. クラミジア感染症		先天性表皮発育異常症	
	20. 伝染性軟属腫		
	21. ウイルス性肝炎	1) HIV	
	22. 後天性免疫不全症候群	1) HTLV-1	
	23. 成人T細胞白血病		
	24. 無菌性髄膜炎		
	25. 日本脳炎		
	26. 狂犬病		
	27. 天然痘（痘瘡）		
	28. ウエスト（西）ナイル		
ウイルス感染症			
29. ハンタウイルス肺症候			
群			
30. 重症急性呼吸器症候群			
(SARS)			
	1. オウム病	1) Chlamydia psittaci	
	2. クラミジア肺炎	1) Chlamydia pneumoniae	
	3. 鼠径（性病性）リンパ	1) Chlamydia trachomatis	
	肉芽腫症		
	4. トラコーマ		
	5. 非淋菌性尿道炎		
	6. 性器クラミジア感染症		
III. マイコプラズマ	1. マイコプラズマ肺炎		
感染症			
IV. リケッチア感染症	1. 発疹チフス		
	2. つつが虫病		
	3. 日本紅斑熱		
	4. 腺熱リケッチア症		
	5. Q熱		
V. 細菌感染症	1. 敗血症		
	2. レンサ球菌感染症	1) A・B群レンサ球菌感染症、肺炎球菌感染症	
	3. ブドウ球菌感染症	1) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌	
		2) ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群、伝染性膿痂疹	

大項目	中項目	小項目	備考	
VI. 嫌気性菌感染症	4. 淋菌感染症			
	5. 髄膜炎菌感染症			
	6. 細菌性赤痢			
	7. サルモネラ感染症	1) 腸チフス、パラチフス		
	8. ヘモフィルス感染症	1) インフルエンザ桿菌感染症		
	9. 百日咳			
	10. コレラ			
	11. 大腸菌感染症	1) 腸管病原性大腸菌 a) 溶血性尿毒症症候群		
	12. クレブシエラ感染症	1) 肺炎桿菌感染症		
	13. セラチア感染症			
	14. エルシニア感染症			
	15. 腸炎ビブリオ感染症			
	16. カンピロバクター感染症			
	17. リステリア感染症			
	18. 猫ひっかき病			
	19. 緑膿菌感染症			
	20. 非醗酵グラム陰性桿菌感染症			
	21. レジオネラ感染症			
	22. ジフテリア			
	23. モラクセラカタラーリス感染症			
	24. ペスト			
	25. ヘリコバクター・ピロリ感染症			
	26. 炭疽			
	27. 野兔病			
	28. 鼻疽、類鼻疽			
	29. ブルセラ症			
	VII. マイコバクテリア感染症	1. 破傷風		
		2. ボツリヌス症		
		3. 偽膜性大腸炎		
4. ガス壊疽				
5. 無芽胞嫌気性菌感染症		1) バクテロイデス感染症		
6. 放線菌症				
VIII. スピロヘータ感染症	1. 結核			
	2. 非定型抗酸菌症			
	3. Hansen 病 (らい)			
VIII. スピロヘータ感染症	1. 梅毒			
	2. ライム病			

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
IX. 真菌症	3. レプトスピラ病(Weil 病)  1. カンジダ症 2. クリプトコッカス症 3. アスペルギルス症  4. ムーコル症 5. ノカルジア症 6. 白癬 7. 癩風 8. スポロトリコーシス 9. 黒色真菌感染症 10. ニューモシスチス肺炎	1) 口腔カンジダ症 (鵞口瘡)  1) アレルギー性気管支肺アスペルギルス症	
X. 原虫症	1. 赤痢アメーバ症 2. マラリア 3. トキソプラズマ症 4. クリプトスポオリジウム症 5. ランブル鞭毛虫症 6. トリコモナス症 7. リューシュマニア症		
XI. 線虫症	1. 鉤虫症 2. 蟻虫症 3. 糞線虫症 4. 回虫症 5. 糸状虫症 (フィラリア症) 6. アニサキス症 7. 顎口虫症		
XII. 吸虫症	1. 住血吸虫症 2. 肺吸虫症 3. 肝吸虫症 4. 横川吸虫症		
XIII. 条虫症	1. 広節裂頭条虫症 (日本海裂頭条虫症) 2. 無鉤条虫症 3. 有鉤条虫症、有鉤囊虫症 4. 包虫症 (エキノコックス)		

参考図書

Mandell, Douglas, Bennett	Principles and Practice of Infectious Diseases (6th)	Chuechill Livingstone	2005
戸塚恭一、山浦 常	ニューチャート内科8・感染症	医学評論社	2001
重松逸造 他偏	伝染予防必携 (第4版)	日本公衆衛生協会	1992
島田 馨 他偏	NIM 感染症学	医学書類	1991
Richard E. Reese, Robert F. Betts	A Practical Approach to Infectious Disease (4th ed)	Little, Brown and Company	1996
Committee on Infections Diseases American Academy of Pediatrics	Red Book (29th)	American Academy of Pediatrics	2012

## [免疫・アレルギー疾患・膠原病]

科目責任者：山中 寿（膠原病リウマチ痛風センター）

この科目では、総論として免疫系組織の成り立ちと各種免疫担当細胞の役割、免疫グロブリン、補体、サイトカインの機能と免疫応答調整について学び、免疫寛容や過剰応答となる自己免疫疾患の発症機序などの理解を深める。各論として自己免疫疾患の代表である全身性エリテマトーデスをはじめとするリウマチ膠原病疾患、国民病ともいわれる花粉症、臨床上遭遇しうる薬剤アレルギーやアナフィラキシーなどをはじめとするアレルギー性疾患、さらには今日増加している移植医療における組織適合性抗原や移植免疫、原発性免疫不全症候群などの病態と治療を学ぶ。

（評価方法）

筆記試験。

### [総論]

大項目	中項目	小項目	備考
I. 免疫	A 免疫系臓器	1) 中枢性免疫系臓器（骨髄、胸腺） 2) 末梢性免疫臓器（リンパ節、脾、扁桃、粘膜関連リンパ組織<MALT>）	TLR(toll-like receptor) ヘルパーT細胞(Th1, Th2, Th17)、細胞傷害性T細胞<CTL>、制御性T細胞<T reg>
	B 自然免疫	1) 好中球、好酸球、単球、NK細胞	
	C 獲得免疫	1) Tリンパ球<T細胞>  2) Bリンパ球<B細胞>、形質細胞 3) 抗原提示細胞（マクロファージ、樹状細胞）、リンパ濾胞	
	D 免疫系の調節	1) 免疫グロブリン 2) 補体 3) サイトカイン、ケモカイン 4) 免疫応答とその調節 5) 組織適合性抗原(HLA) 6) 免疫寛容	
II. アレルギー、免疫異常	A 免疫異常疾患	1) 免疫不全 2) 自己免疫疾患	アナフィラキシー
	B アレルギー	1) Coombs分類	

[各 論]

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
I . アレルギー 性疾患	A 全身性	アナフィラキシー 薬物アレルギー 食物アレルギー  血清病 昆虫アレルギー 職業性アレルギー	食物依存性運動誘 発アナフィラキシ ー
	B 皮膚・粘膜	アレルギー性結膜炎 鼻アレルギー（アレルギー性鼻炎） 花粉症 蕁麻疹 アトピー性皮膚炎 アレルギー性接触皮膚炎 血管性浮腫	C1 インヒビター 欠損症
	C 呼吸器	気管支喘息 好酸球性肺疾患 アレルギー性肺アスペルギルス症 過敏性肺臓炎	
II . 膠原病と類 縁疾患	A 膠原病	全身性エリテマトーデス 全身性硬化症（強皮症） 皮膚筋炎・多発性筋炎 結節性多発動脈炎 関節リウマチ	
	B 血管炎を主とする類縁疾 患	巨細胞性動脈炎（側頭動脈炎） 高安動脈炎（大動脈炎症候群） 顕微鏡的多発血管炎 好酸球性多発血管炎性肉芽腫症 （Churg-Strauss 症候群） 多発血管炎性肉芽腫症（Wegener 肉 芽腫症） 過敏性血管炎 アナフィラクトイド紫斑病 クリオグロブリン血症 Goodpasture 症候群	ANCA 関連血管炎  ANCA 関連血管炎

大項目	中項目	小項目	備考
	C 関節炎を主体とする類縁疾患	リウマチ熱 悪性関節リウマチ 成人発症 Still 病 強直性脊椎炎 反応性関節炎 Felty 症候群 乾癬性関節炎 掌蹠膿疱症性関節炎 痛風 偽痛風	弁膜症  結晶誘発性関節炎
	D その他の類縁疾患	混合性結合組織病 Sjögren 症候群 抗リン脂質抗体症候群 リウマチ性多発筋痛症 サルコイドーシス Behçet 病 Weber-Christian 病 再発性多発軟骨炎 アミロイドーシス IgG4 関連疾患 線維筋痛症 慢性疲労症候群	
Ⅲ. 原発性免疫不全症	A 複合型免疫不全症	重症複合免疫不全症	
	B 抗体産生不全を主とする免疫不全症	無ガンマグロブリン血症 選択的 IgA 欠乏症	
	C 他のよく定義された免疫不全症	Wiskott-Aldrich 症候群 毛細血管拡張性失調症 (ataxia telangiectasia) 胸腺低形成 (DiGeorge 症候群)	
	D 免疫調節不全症	Chediak-Higashi 症候群	
	E 食細胞機能不全症 F 補体欠損症	慢性肉芽腫症	
Ⅳ. 続発性免疫不全症	A 感染による免疫不全症	後天性免疫不全症候群 (AIDS)	
	B 悪性腫瘍による免疫不全症		
	C 自己免疫疾患による免疫不全症		

大項目	中項目	小項目	備考
V. その他の重要な小児領域の疾患	D 医原性免疫不全症 A 膠原病と類縁疾患	若年性特発性関節炎 (JIA) 川崎病	

【免疫・アレルギー疾患・膠原病】

山中 寿 他	EBM を活かす膠原病・リウマチ 診療 改訂第 3 版	メジカルビュー社	2013
上野征夫	リウマチ病診療ビジュアルテキスト 第 2 版	医学書院	2008
三森明大	膠原病診療ノート 第 3 版	日本医事新報社	2013
G.S.Firestein 他編	Kelly' s Textbook of Rheumatology (第 9 版)	Saunders Co.	2013
D.J.Wallace 他編	Dubois Lupus Erythematosus (第 8 版)	Saunders Co.	2012
David Male 他著 (高津聖志 他監訳)	免疫学イラストレイテッド (原著第 7 版)	南江堂	2009
J.T.Cassidy 他編	Textbook of Pediatric Rheumatology (第 6 版)	Saunders Co.	2011
長澤俊彦、二瓶 宏、 湯村和子 編集	膠原病・血管炎の腎障害 Up to Date	東京医学社	2002
二瓶 宏、 湯村和子	図説 腎臓病学 (第 3 版)	日本医事新報社	2005

## [妊娠と分娩]

科目責任者：松井 英雄（産婦人科学）

「妊娠と分娩」は新たな生命が女性の体内に宿る受精から始まり、妊娠の診断・胎児発育更に分娩・産褥に至る女性にとっての一大イベントについて生理的变化および正常妊娠・分娩の転帰を理解する。妊娠・分娩の大多数は正常経過・正常分娩となるが様々な合併症を持った女性の妊娠や分娩管理、また妊娠によって発症する可能性のある妊娠高血圧症候群など異常妊娠や異常分娩の病因、病態生理、治療法を学習する。更に出生前診断などの最新の知識や倫理上の問題点を説明できるように母体保護法などの母子保健についても学ぶ。

（評価方法）

筆記試験。

大項目	中項目	小項目	備考
I. 総論	1. 胎児の発生と発育		
II. 妊娠の成立	1. 妊娠の生理（妊娠の成立と母体の生理現象）	1) 性器の変化 2) 全身の変化（性器外変化）	
	2. 受精のメカニズム	1) 受精の生理 （卵と精子の成熟、受精の機構） 2) 受精卵の分割と輸送 3) 着床（子宮内膜の変化（脱落膜の形成）、着床機構、内分泌調節）	
	3. 胎児胎盤系	1) 胎児胎盤循環（Botallo管、Arantius管） 2) 内分泌（hCG、hPL、エストリオール） 3) ガス交換と物資代謝	
III. 妊娠の診断	1. 妊娠の徴候	1) 自覚徴候（無月経・つわり・悪阻） 2) 他覚徴候（子宮・膣）	
	2. 妊娠診断の検査	1) 基礎体温 2) hCG測定 3) 超音波断層法	

大項目	中項目	小項目	備考
IV. 妊娠と胎児発育	1. 発生の分子メカニズム (生理学的側面)  2. 臓器形成 (発生生物学的側面)  3. 妊娠の管理 a. 妊婦診察  4. 多胎妊娠	1) 妊卵、胎芽、胎児 2) 器官形成期 3) 成長の評価 4) 成長のパターン  1) 呼吸器系 2) 心臓・脈管系 3) 消化器系 4) 内分泌・代謝系 5) 血液・造血器系 6) 免疫系 7) 腎・泌尿器系 8) 生殖器系 9) 神経系 10) 感覚器系 11) 運動器系  1) 妊娠時期の診断 2) 胎児に対する診断 (Leopold診察法) 3) 妊婦検診 4) 頸管成熟度 (Bishopスコア) 5) 妊娠中の緊急時の状態把握  1) 定義、分類 2) 発生、原因 3) 疫学、頻度 4) 症状、診断 (卵性診断: 1卵性、2卵性の鑑別、膜性診断) 5) 合併症の管理 6) 妊娠時の管理 7) 児の予後 (圧縮児、紙様児、双胎間輸血症候群)	
V. 妊娠中の異常	1. 流産	1) 定義 2) 種類 (切迫流産、進行流産、不全流産、完全流産、稽留流産、習慣流産)	

大項目	中項目	小項目	備考
	<p>3. 早産</p> <p>4. 異所性妊娠</p> <p>4. 妊娠高血圧症候群</p>	<p>3) 原因（母体側原因、胎児側原因）</p> <p>4) 病理・症状</p> <p>5) 検査（hCG、超音波断層法）</p> <p>6) 診断（鑑別診断）</p> <p>1) 定義（人工早産、自然早産）</p> <p>2) 原因（絨毛羊膜炎、頸管炎、頸管無力症）</p> <p>3) 治療（<math>\beta</math>2-刺激剤、頸管縫縮術） Shirodkar手術、McDonald手術）</p> <p>4) 予後</p> <p>1) 定義</p> <p>2) 分類、頻度（卵管妊娠（膨大部妊娠、峡部妊娠、間質部妊娠）、腹膜（腔）妊娠、卵巢妊娠、頸管妊娠）</p> <p>3) 原因</p> <p>4) 病理</p> <p>5) 症状</p> <p>6) 診断（妊娠反応、Douglas窩穿刺、超音派診断、腹腔鏡検査）</p> <p>1) 定義、分類（軽症、重症） 子癇（妊娠、分娩、産褥）</p> <p>2) 原因</p> <p>3) 病理、病態生理（胎盤所見）</p> <p>4) 頻度</p> <p>5) 症状</p> <p>6) 診断（予知、予防）</p> <p>7) 治療（食事療法、薬物療法）</p> <p>8) 母児の管理</p> <p>9) 母児の予後（児死亡、SGA (small for gestational age) の発生、症状）</p> <p>10) 子癇（診断（鑑別診断）、治療、予後）</p>	

大項目	中項目	小項目	備考
	<p>5. 胎盤の異常</p> <p>a. 常位胎盤早期剥離 (子宮胎盤溢血)</p> <p>b. 前置胎盤</p> <p>c. 低置(位)胎盤</p> <p>6. 合併症妊娠など</p> <p>a. 血液型不適合妊娠</p> <p>b. 過期妊娠</p> <p>c. 胎盤機能不全</p> <p>d. 子宮内胎児発育遅延 (Fetal growth restriction, FGR)</p> <p>e. Heavy for gestational age</p>	<p>1) 定義</p> <p>2) 病理</p> <p>3) 症状 (DIC)</p> <p>4) 診断、鑑別診断</p> <p>5) 処置、管理</p> <p>1) 定義、分類 (全前置胎盤、部分前置胎盤、辺縁前置胎盤)</p> <p>2) 症状 (予告出血)</p> <p>3) 診断 (超音波断層法、倚褥感)</p> <p>4) 鑑別診断</p> <p>5) 処置、管理</p> <p>1) 診断</p> <p>2) 管理</p> <p>1) 定義</p> <p>2) 分類 (ABO不適合、Rh(D)不適合、その他の血液型不適合)</p> <p>3) 検査 (Rh型、間接クームス試験、直接クームス試験、羊水分析)</p> <p>4) 管理 (交換輸血、光線療法)</p> <p>5) 次回妊娠の予防、予後 (抗Rhヒト免疫グロブリン)</p> <p>1) 定義 (分娩予定日補正)</p> <p>2) 検査、診断 (胎児胎盤機能検査)</p> <p>3) 児への影響</p> <p>1) 定義</p> <p>2) 原因</p> <p>3) 診断</p> <p>1) 頻度</p> <p>2) 種類 (合併症が妊娠母体に与える影響、合併症が胎児に与える影響、</p>	

大項目	中項目	小項目	備考
	f. ハイリスク妊娠 g. 妊娠偶発合併妊娠  h. 子宮奇形  i. 子宮筋腫 j. 子宮頸癌 k. 卵巣腫瘍 l. 心臓・血管疾患 m. 血液疾患  n. 泌尿器疾患  o. 肝・胆道疾患   p. 呼吸器疾患 q. 内分泌・代謝疾患 r. 自己免疫疾患 s. 感染症（母児感染、垂直感染）  7. 出生前診断と胎児治療 a. 羊水検査	妊娠が合併症に与える影響)  1) 子宮奇形（子宮欠損、双角子宮、 双頸双角子宮、副角子宮（副子宮）、 重複子宮）診断・治療 （HSG、Strassmann手術、Jones&Jones 手術（不妊症、流産））  1) NYHA分類 1) 貧血 2) ITP 1) 腎炎 2) 腎不全 1) 黄疸 2) 肝炎 3) 急性妊娠脂肪肝 4) HELLP症候群  1) 種類（糖尿病、甲状腺疾患） 1) 全身性エリテマトーデス 1) 梅毒 2) サイトメガロウイルス感染症 3) 風疹 4) B型肝炎 5) ヘルペス感染症  1) 染色体分析 2) 生化学的検査（胎児成熟度の検査） （サーファクタント、△OD450）、 L/S比、shake test、血液型不適合妊娠）	

大項目	中項目	小項目	備考
	b. 胎児機能・胎児胎盤機能	1) エストリオール (E3) 2) hPL 3) 酸素 4) 胎児発育度 5) 胎児成熟度 6) 羊水鏡 7) 胎児心拍数モニタリング	
	c. 胎児発育	1) 胎児超音波検査 (ドプラ法、Bモード) 2) biophysical profile score	
	d. 遺伝子病	1) 種類 2) 診断	
	e. 染色体異常	1) 種類	
	f. 胎児病	1) 種類 2) 診断	
	g. 多胎		
	h. 胎児発育不全	1) 病因 2) 診断	
	i. 溶血性疾患		
	j. 形態異常	1) 種類 (無脳症、小頭症、水頭症、二分脊椎、唇裂、口蓋裂、横隔膜ヘルニア、気管食道瘻、消化管閉鎖、臍帯ヘルニア、消化管破裂、鎖肛) 2) 診断	
	k. 胎児水腫		
	1. 子宮内胎児死亡	1) 死胎児症候群 2) 超音波診断法	
VI. 分娩	1. 分娩の生理三要素 a. 産道	1) 骨産道 (入口部 (真結合線、入口の形態) 潤部、峡部 (坐骨棘)、出口部 (恥骨開角、結節間距離)、骨盤	

大項目	中項目	小項目	備考
	<p>b. 娩出物（胎児）</p> <p>c. 娩出力</p> <p>2. 正常分娩の経過と管理</p> <p>a. 分娩の経過</p> <p>b. 管理</p>	<p>誘導線（骨盤軸）</p> <p>2) 軟産道（産道の形成・通過管（頸管の開大・短縮・子宮下部の形成））</p> <p>1) 児頭（縫合・泉門、児頭計測、児頭の変形（応形機能）、産瘤）</p> <p>2) 胎向（第1、2胎向）</p> <p>胎位（頭位、骨盤位、横位、斜位）</p> <p>胎勢（屈位、反屈位）</p> <p>1) 陣痛（陣痛の性格、発来機序、陣痛の計測、妊娠陣痛、前駆陣痛、分娩陣痛、後陣痛）</p> <p>2) 腹圧</p> <p>1) 産徴（血性分泌物）</p> <p>2) 開始</p> <p>3) 分娩時期（第1期（開口期）、第2期（娩出期）、第3期（後産期）、止血の機序）</p> <p>4) 破水（適時破水、非適時破水（前期破水、早期破水、遅滞破水））</p> <p>5) 児頭の浮動、進入、固定、嵌入、下降</p> <p>6) 回旋（第1～第4回旋）</p> <p>7) 児の娩出（排臨、発露、応形機能、骨重積）</p> <p>8) 胎盤の娩出（剥離機転、胎盤後血腫、剥離徴候（胎児面より娩出、母体面より娩出、混合型娩出））</p> <p>1) 分娩時期の診断</p> <p>2) 胎児の位置の診断</p> <p>3) 胎児の大きさの診断</p> <p>4) 胎児の下降度の診断・表現法（下向部、先進部、station、入口部、潤部、峡部、出口部、高在、中在、低在の意味）</p> <p>5) 児頭回旋の診断・表現法</p> <p>6) 頸管開大部（Friedman曲線）</p> <p>7) 陣痛の観察、胎児心拍の観察</p> <p>8) パルトグラム</p>	

大項目	中項目	小項目	備考						
VII. 産褥	3. 分娩の取り扱い 4. 産科出血 a. 弛緩出血 b. 分娩時異常出血 5. 難産 a. 胎児性難産 b. 遷延分娩 6. 妊娠中、分娩時の麻酔（麻酔科学的側面） 7. 分娩監視と胎児機能不全 a. 分娩監視装置	9) 分娩中の緊張時の状態把握 1) 産婦の取り扱い（分娩介助法（会陰切開法） 1) 鑑別診断 2) 処置（救急処置、止血法、麦角剤） 1) 病因 2) 鑑別診断 1) 病因（巨大児、肩甲難産、水頭症、胎児奇形） 1) 定義 2) 病因 3) 処置 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="font-size: 2em;">[</td> <td>経膈産科手術：吸引分娩</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="padding-left: 2em;">鉗子分娩</td> </tr> <tr> <td style="font-size: 2em;">]</td> <td>経腹産科手術：帝王切開</td> </tr> </table> 1) 妊娠時の生理学的変化 2) 妊娠中の非産科的外科手術の麻酔 3) 経膈分娩の麻酔（無痛分娩） 4) 帝王切開の麻酔 1) 陣痛曲線 2) 胎児心拍数モニタリング 胎児心拍数基線：正常整脈、頻脈、徐脈 胎児心拍数基線細変動、胎児心拍数一過性変動：一過性頻脈、一過性徐脈： early deceleration（早発一過性徐脈） late deceleration（遅発一過性徐脈） variable deceleration（変動一過性徐脈） prolonged deceleration（遷延一過性徐	[	経膈産科手術：吸引分娩		鉗子分娩	]	経腹産科手術：帝王切開	
[	経膈産科手術：吸引分娩								
	鉗子分娩								
]	経腹産科手術：帝王切開								

大項目	中項目	小項目	備考
	<p>b. 血液ガス分析</p> <p>c. 胎児機能不全 (non-reassuring fetal status: NRFS)</p> <p>1. 正常産褥</p> <p>2. 異常産褥</p> <p>a. 初期出血 (軟産道裂傷、弛緩出血)</p> <p>b. 晩期出血 (子宮復古不全)</p> <p>c. 産褥熱</p> <p>d. 血栓性静脈炎、白股腫</p> <p>e. 乳腺炎</p>	<p>脈) LTV、sinusoidal pattern、reassuring pattern、non-reassuring pattern</p> <p>3) ノンストレステスト (NST)</p> <p>4) コントラクションストレステスト (CST)</p> <p>5) オキシトシンチャレンジテスト (OCT)</p> <p>1) 児頭採血</p> <p>1) 定義</p> <p>2) 病因</p> <p>3) 診断 (胎児心拍数モニタリング、胎児胎盤機能検査法、児頭末梢血pH)</p> <p>4) 病態生理</p> <p>5) 処置</p> <p>6) 予後</p> <p>1) 産褥の定義</p> <p>2) 後陣痛</p> <p>3) 子宮復古</p> <p>4) 悪露 (赤色悪露、褐色悪露、黄色悪露、白色悪露)</p> <p>5) 産褥性無月経、授乳性無月経、産褥期の諸種ホルモン動態、とくに下垂体・卵巢系)</p> <p>6) 全身の復古</p> <p>1) 病因</p>	

大項目	中項目	小項目	備考
VIII. 母子保健	f. 乳汁分泌不全 g. 産褥精神病 (マタニティブルー)		
	1. 母子関連統計	1) 人口動態統計 2) 妊産婦死亡 3) 周産期死亡 4) 死産 5) 人工妊娠中絶 6) 乳児死亡	
	2. 母子関連法規	1) 母体保護法 2) 母子保健法 3) 児童福祉法 4) 新感染症予防法 5) 労働基準法	
IX. 遺伝相談	3. 診断書・証明書	出生証明書、死亡診断書、死体検案書、死胎検案書、死産証書、死亡届、出生届	
	1. 遺伝カウンセリング		
	2. 出生前診断 3. 医の倫理		

### 産婦人科参考図書

- |                                       |  |                              |      |
|---------------------------------------|--|------------------------------|------|
| 1. J A. Pritchard,<br>P. C. MacDonald | Williams Obstetrics                      | Appleton &<br>Century Crofts | 2005 |
| 2. Robert J. Kurman                   | Pathology of the Female<br>Genital Tract | Springer-Verlag              | 2002 |
| 3. 佐藤和雄、藤本征一郎                         | 臨床エビデンス産科学                               | メジカルビュー社                     | 1999 |
| 4. 周産期医学編集委員会編                        | 周産期ケアエビデンスケアを求めて                         | 東京医学社                        | 2004 |
| 5. 岡村州博編                              | 周産期救急のコツ                                 | 中山書店                         | 2004 |
| 6. 太田博明監修                             | 産婦人科外来マニュアル                              | メジカルビュー社                     | 2006 |
| 7. 日本産科婦人科学会編                         | 産婦人科研修の必須知識2007                          | 杏林舎                          | 2007 |

## [新生児・小児・思春期]

科目責任者： 永田 智（小児科学教室）

### 学習の到達目標

以下の目標は、常に、発達段階別に人が置かれる環境との関連で学習する。

発達段階別に人が置かれる環境とは、母胎内生活、出生（母胎内から母胎外生活への適応）、乳児期（家庭内生活・完全な依存状態から日常生活動作機能の獲得）、幼児期（日常生活動作機能の確立、家庭外集団との関わり開始、各感染症への免疫の獲得）、学童（家庭外集団への適応、種々能力の基礎形成、家庭外集団での責任ある役割分担開始）、思春期（成人への準備としての精神身体の変化とアイデンティティの確立に至るまでのアンバランス、家庭外集団での責任ある役割、受験勉強の影響など）である。

### 行動目標

出生から思春期に至る児の

生理的発育を理解し、説明できる。

各機能系の発達を理解し、説明できる。

それぞれの時期で起こりやすい問題、異常、疾患を親子関係を含む環境、社会との関連も含め理解し考える事ができる。

（評価方法）

筆記試験。

大項目	中項目	小項目	備考
I. 総論	1. 小児の成長・発達と小児医学の特徴(ライフスパンを通じた病者の全人格的理解など)		
II. 新生児	1. 新生児の特徴	1) 新生児周産期統計 a) 周産期死亡率 b) 新生児死亡率 c) 諸外国との比較 2) 用語の定義 a) 在胎週数 b) 低出生体重児 c) 早産児 3) 胎児発育曲線 a) light-for-date b) heavy-for-date 4) 新生児学の特徴 a) 医学的特徴 b) 医療的特徴 5) 新生児の生理	

大項目	中項目	小項目	備考
	2. 新生児、未熟児 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>a) 呼吸 <ul style="list-style-type: none"> <li>①第1呼吸確立の生理</li> <li>②肺の生化学的成熟</li> <li>③呼吸調節機構</li> </ul> </li> <li>b) 循環 <ul style="list-style-type: none"> <li>①移行期の血行動態の変化</li> <li>②胎児循環と新生児循環の違い</li> </ul> </li> <li>c) 神経系 <ul style="list-style-type: none"> <li>①神経機能適応</li> <li>②神経機能の発達</li> </ul> </li> <li>d) 消化器系 <ul style="list-style-type: none"> <li>①消化吸収の特徴</li> <li>②機能的発達と適応</li> </ul> </li> <li>e) 代謝・内分泌系 <ul style="list-style-type: none"> <li>①カルシウム、リン</li> <li>②水、電解質</li> <li>③内分泌系の発達と適応</li> </ul> </li> <li>f) 血液・免疫 <ul style="list-style-type: none"> <li>①生後の適応と血液成分の変化</li> <li>②免疫機能の変化</li> </ul> </li> <li>g) 体温 <ul style="list-style-type: none"> <li>①体温調節機能</li> <li>②出生後の体温変化</li> </ul> </li> </ul> <p>新生児の基礎と臨床など</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 新生児の診察 <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 分娩室における新生児診察 <ul style="list-style-type: none"> <li>①産科情報の評価</li> <li>②アプガースコア</li> <li>③蘇生術</li> </ul> </li> <li>b) 成熟度評価 <ul style="list-style-type: none"> <li>①Dubowitz 法</li> </ul> </li> <li>c) 新生児診察 <ul style="list-style-type: none"> <li>①一般的注意</li> <li>②新生児特有の正常所見</li> <li>③神経学的評価</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>2) 新生児の一般的養護 <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 新生児管理の原則 <ul style="list-style-type: none"> <li>①新生児医療の原則</li> <li>②ルーチンとポリシー</li> <li>③出生から退院までの医療の流れ</li> </ul> </li> <li>b) 保温 <ul style="list-style-type: none"> <li>①中性温度環境</li> <li>②低体温</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>	

大項目	中項目	小項目	備考
	3. 新生児、未熟児 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>c) 感染防止               <ul style="list-style-type: none"> <li>① ガウンテクニック</li> <li>② 院内感染</li> </ul> </li> <li>d) 栄養               <ul style="list-style-type: none"> <li>① 母乳の特性</li> <li>② 人工栄養法</li> <li>③ 栄養必要量</li> </ul> </li> <li>e) 母子関係               <ul style="list-style-type: none"> <li>① 母子相互作用</li> </ul> </li> <li>f) ハイリスク児の養護               <ul style="list-style-type: none"> <li>① その定義</li> <li>② 超早産児の養護</li> <li>③ 胎内発育制限</li> <li>④ 母体糖尿病児</li> </ul> </li> </ul> <p>母子感染と予防を含む新生児に 起こりやすい疾患</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1) 新生児診断学           <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 主要な症状               <ul style="list-style-type: none"> <li>① 特異顔貌</li> <li>② not-doing well</li> <li>③ チアノーゼ</li> <li>④ 黄疸</li> <li>⑤ 新生児メレナ</li> <li>⑥ 腹満、嘔吐</li> <li>⑦ けいれん</li> </ul> </li> <li>b) 検査と評価               <ul style="list-style-type: none"> <li>① 血液検査</li> <li>② CT/EEG/ABR</li> <li>③ 超音波</li> </ul> </li> <li>c) モニター機器と評価               <ul style="list-style-type: none"> <li>① 呼吸心拍</li> <li>② 経皮的酸素モニター、パルスオキシメータ</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>2) 新生児疾患各論           <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 神経・筋               <ul style="list-style-type: none"> <li>① 無酸素脳症</li> <li>② 頭蓋内出血</li> <li>③ ミオパチー</li> </ul> </li> <li>b) 呼吸器               <ul style="list-style-type: none"> <li>① 呼吸窮迫症候群</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>	

大項目	中項目	小項目	備考
	<p>4. 先天異常一般</p> <p>5. 新生児医療と保健対策</p>	<p>②胎便吸引症候群</p> <p>③一過性多呼吸</p> <p>④BDP/Wilson-Mikity</p> <p>c) 循環器</p> <p>①チアノーゼ(メトヘモグロビン血症)</p> <p>②心不全型心疾患</p> <p>d) 高ビリルビン血症</p> <p>①生理的黄疸</p> <p>②血液型不適合</p> <p>e) 代謝異常</p> <p>①低血糖</p> <p>②低カルシウム血症</p> <p>③先天代謝異常</p> <p>f) 血液</p> <p>①多血症</p> <p>②貧血〔未熟児貧血(早期貧血と晩期貧血)〕</p> <p>③血小板減少症</p> <p>g) 感染・免疫</p> <p>①敗血症</p> <p>②TORCH</p> <p>③免疫異常</p> <p>h) 分娩外傷</p> <p>①Erbの麻酔</p> <p>②骨折</p> <p>3) その他</p> <p>a) 新生児の予後</p> <p>①新生児医療の倫理</p> <p>1) 配偶子病：染色体異常症(常染色体異常：Down症候群、13trisomy、18trisomy、5P欠失症候群；性染色体異常：Turner症候群、Klinefelter症候群)</p> <p>2) 胎芽病</p> <p>3) 胎児病</p> <p>4) 小奇形</p> <p>1) 新生児の保健</p> <p>a) ハイリスク児</p> <p>b) 低出生体重児</p> <p>c) 新生児のマスククリーニング</p>	

大項目	中項目	小項目	備考
III. 乳幼児の成長・発達	6. 胎児・新生児・乳児に関する法医学的問題	2) 妊産婦・褥婦の保健 a) ハイリスク妊娠 b) 母子健康手帳 c) 健康診査 d) 妊産婦死亡 e) 人工妊娠中絶 f) 家族計画 3) 環境因子との関わり a) 飲酒と喫煙 b) 感染症 c) 薬物・放射線 d) 環境中有害物 1) 関係法規 a) 刑法：遺棄罪（飢餓死凍死） b) 相続法 c) 戸籍法 d) 死産証書、死体検案書 2) 民法、刑法上の問題点 a) 胎児の法的取り扱い b) 嬰児殺し c) <u>被虐待児症候群</u> d) <u>乳児突然死症候群</u>	
	1. 乳児の特徴と乳児の成長・発達 1  2. 乳児の成長 2	1) 正常乳児 2) 各臓器の成長発達 a) 呼吸器系    b) 消化器系 c) 腎・尿路系    d) 血液及び造血系 e) 内分泌系    f) 循環器系など 3) 体脂肪の構成の成長による変化と役割 4) 体水分組成の成長による変移と役割 5) 骨格筋の成長による変化 6) 以上の変移に伴う外見上の変化  1) 栄養所要量（含むビタミン） 2) 母乳栄養（組成、利点） 3) 人工栄養 4) 離乳（鉄欠乏症貧血（離乳食の遅れ、不適切な食餌、断乳の意義） 5) 栄養状態の評価	

大項目	中項目	小項目	備考
IV. 乳幼児の罹りやすい疾患	<p>3. 乳幼児期の精神発達</p> <p>1. 乳幼児期の精神発達障害</p> <p>2. 発熱、発疹と関連疾患など</p> <p>3. 咳、呼吸困難と関連疾患など</p>	<p>6) 乳児の代謝の特性</p> <p>7) 体重増加不良/栄養障害など</p> <p>1) 母子相互作用（愛着行動、基本的信頼）</p> <p>2) 言語発達</p> <p>3) 母子分離</p> <p>4) 対人関係（社会性）の発達</p> <p>5) 発達の評価（日本版 Denver 方式を含む発達指数、知能指数）</p> <p>6) 視力、聴力の発達</p> <p>1) 母子相互作用確立の障害と被虐待児</p> <p>2) 言語発達の障害</p> <p>3) 母子分離の障害</p> <p>4) 対人関係（社会性）の発達の障害（自閉症）</p> <p>5) 視力、聴力の発達の障害（難聴）</p> <p>6) 異常行動（指しゃぶり、異食、チック、憤怒痙攣）</p> <p>1) 体温調節・発熱の機序と全身状態への影響</p> <p>2) 発熱の評価と鑑別診断</p> <p>a) 発疹を伴う場合：感染症疾患（ウイルス：麻疹、風疹、突発性発疹、ヘルパンギーナ、手足口病、急性出血性結膜炎、単純ヘルペス感染症水痘、帯状疱疹、伝染性紅斑、伝染性単核症；細菌：溶連菌感染症、膠原病関連：川崎病、リウマチ熱、Henoch-Schonlein 紫斑病、血液疾患：組織球増殖症など</p> <p>b) 発疹を伴わない場合：感染症疾患（ウイルス：インフルエンザ、アデノウイルス、ムンプス、エンテロウイルス感染症、ポリオ、細菌性、その他）</p> <p>1) 小児の気道・胸廓の解剖学的特徴</p> <p>2) 小児の呼吸機能の特徴</p> <p>3) 小児の呼吸器疾患の特徴</p> <p>4) 小児の呼吸器疾患の徴候と診察法 咳、喘鳴、呼吸困難、睡眠障害</p>	

大項目	中項目	小項目	備考
	<p>4. 下痢症、嘔吐と関連疾患など</p> <p>5. 黄疸、腹痛と関連疾患など</p>	<p>5) 呼吸困難を来す疾患（仮性クループ、気道異物、気管支炎、細気管支炎、肺炎、気管支喘息）</p> <p>6) 呼吸器疾患が乳児に及ぼす影響鼻閉と哺乳（口呼吸の確立）</p> <p>7) 小児の罹りやすい呼吸器疾患</p> <p>a) 上気道疾患</p> <p>①上気道炎（かぜ症候群）</p> <p>②急性咽頭・扁桃炎</p> <p>③急性咽頭炎</p> <p>④急性声門下咽頭炎 クループ</p> <p>⑤先天性喘息</p> <p>b) 下気道疾患</p> <p>①気管・気管支・肺の発育異常</p> <p>②気管支炎</p> <p>③細気管支炎</p> <p>④肺炎（細菌：肺炎球菌、百日咳、ブドウ球菌、RS ウイルス、クラミジア）</p> <p>c) 呼吸中枢の異常：低換気症候群（睡眠時無呼吸症候群、Pickwick症候群を含む）</p> <p>1) 乳児下痢症（冬季ウイルス性下痢症：ロタ、アデノ）</p> <p>2) 便秘症</p> <p>3) 吸収不良症候群</p> <p>4) 蛋白漏出性腸症</p> <p>5) 食中毒（腸炎ビブリオ、サルモネラ、ブドウ球菌、エルシニア、カンピロバクター）</p> <p>1) 乳児肝炎 ウイルス性肝炎</p> <p>2) 先天性ビリルビン代謝異常</p> <p>3) 肝内胆汁うっ滞</p> <p>4) Wilson 病（肝レンズ核変性症）</p>	
V. 乳幼児治療・医療の特徴	1. 小児の外科治療	<p>1) 消化器</p> <p>a) 消化器奇形</p> <p>①先天性食道閉鎖と食道狭窄</p> <p>②食道アカラシア</p> <p>③横隔膜疾患</p> <p>(1) 横隔膜ヘルニア</p> <p>④上部消化管</p> <p>(1) 肥厚性幽門狭窄症</p>	



大項目	中項目	小項目	備考
VI. 小児の成長・発達・保健		c) 神経系 d) 代謝系 2) 麻酔法 a) 麻酔器・麻酔法 3) 麻酔管理 a) 麻酔前評価 b) 麻酔前投薬 c) 呼吸管理 d) 循環管理 e) 輸液管理 f) モニタリング g) 合併症	
	5. 小児の事故とその対策	1) 小児の事故の重要性 2) 小児の事故を発達から理解する 3) 誤飲・誤嚥の予防と救急処置 (吐かせて良い物いけない物) 4) 溺水の予防	
	6. 遺伝子と疾患、先天異常と遺伝相談など	1) メンデル遺伝の遺伝相談 2) 非メンデル遺伝の遺伝相談	
	7. 小児医療と保健対策	1) 乳・幼児・小児の保健 a) 新生児・乳幼児の健康診査 b) 感染症予防（予防接種） c) 小児医療費公費負担制度 d) 心身障害児の早期発見と対策 e) 養育医療	
	1. 幼児の成長発達	1) 身体測定と成長評価（Rohres指数） a) 身長・体重・頭囲・胸囲の測定値の評価（成長曲線） 2) 体構成の年齢的变化 a) 体脂肪の構成の成長による変化と役割 b) 体水分組成の成長による変化 c) 骨格筋の成長による変化 d) 以上の変移に伴う外見上の変化（予防接種、感染症の予防を含む）等	
	* 2. 幼児のかかりやすい疾患	1) 各種の日常感染症 幼児の感染症の特徴 上気道炎	

大 項 目	中 項 目	小 項 目	備 考
	<p>3. 学童の成長発達 1</p> <p>4. 学童のかかりやすい疾患 1</p> <p>5. 学校保健</p>	<p>中耳炎 中枢神経系感染症（各種髄膜炎） 尿路感染症 急性虫垂炎</p> <p>2) 川崎病</p> <p>1) 身体測定と成長評価 a) 成長曲線（Rohrer 指数、統計的評価） b) 成長パターン 病児の学校生活管理など</p> <p>2) 体構成の年齢的变化 a) 乳幼児期につづく体構成成分比の変移 b) 骨格筋の発達 c) 異常の変移に伴う外見上の变化（低身長）</p> <p>3) 学童期の栄養 a) 栄養所要量 b) 栄養状態の評価 c) 学童の代謝の特性</p> <p>4) 学童の発達 a) 運動発達 b) 知能発達 c) 社会的適応の評価</p> <p>5) 各臓器の成長発達 a) 呼吸器系 b) 消化器系 c) 腎・尿路系 d) 血液及び造血系 e) 内分泌系 f) 循環器系 g) 精神神経系</p> <p>アレルギー、免疫、気管支喘息、不明熱、膠原病（リウマチ熱、若年性関節リウマチ、突発性血小板減少性紫斑病、多形滲出性紅斑）、急性腸炎、急性出血性結膜炎（アポロ病）プール熱、マイコプラズマ肺炎など</p> <p>1) 学齢期の罹患と死亡 2) 学校医と保健管理 a) 学校医と学校保健法 b) 健康診断（就学時、定期、臨時）</p>	

大項目	中項目	小項目	備考
VII. 思春期の成長・発達と問題点	6. 親子関係の精神医学	<ul style="list-style-type: none"> <li>c) 学校伝染病</li> <li>3) 学校環境、安全               <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 学校環境衛生基準</li> <li>b) 事故と対策</li> </ul> </li> <li>1) 親の役割</li> <li>2) 親の態度と児童の人格形成</li> <li>3) 崩壊家族と欠損家族</li> <li>4) 精神障害と家族               <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 登校拒否</li> <li>b) 家庭内暴力</li> <li>c) 摂食障害</li> <li>d) 精神分裂病</li> </ul> </li> <li>5) 家族療法</li> </ul>	
	7. 学童の精神発達	夜尿症、遺尿症、遺糞症、夜驚症、チック	
	8. 家族への対応	死に至る児と家族の心理的支持、インフォームド・コンセント	
	1. 思春期の成長・発達	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 概念               <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 学童期の後半から思春期が始まる</li> <li>b) 小児が成人となり生殖能力を有するための変化の時期（個人差大）</li> </ul> </li> <li>2) 身体の成長発達               <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 二次性徴</li> <li>b) 月経開始と精通</li> <li>c) growth spurt</li> </ul> </li> <li>3) 精神発達               <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 思春期危機</li> <li>b) 自己同一性形成（性役割）</li> <li>c) 学習と社会経験</li> <li>d) 慢性疾患と管理</li> </ul> </li> </ul>	
	2. 思春期・青年期の心理と精神（発達）障害	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 心理的特徴               <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 前青年期</li> <li>b) 青年期前期</li> <li>c) 青年期中期</li> <li>d) 青年期後期</li> </ul> </li> <li>2) 精神（発達）障害               <ul style="list-style-type: none"> <li>a) 登校拒否</li> <li>b) 暴力・いじめ</li> </ul> </li> </ul>	

大項目	中項目	小項目	備考
	3. 思春期に問題となりやすい疾患と反応	c) 非行 d) 対人恐怖 e) 強迫症 f) 摂食障害 g) アパシー症候群 h) 青年期境界例 i) 精神分裂病 j) 躁うつ病  1) ヒステリー 2) 過換気症候群 3) 神経性食思不振症 4) 神経性過食症 生育歴と不登校家庭内暴力	

参考図書

教科書:

1. 佐地勉、有阪 治、大澤真木子ら(編) 講義録「小児科学J(第1版) メジカルビュー 2008
2. 衛藤義勝(監修)、五十嵐 隆、大澤真木子、河野陽一ら(編) ネルソン小児科学(原書17版) エルゼビアジャパン 2005
3. 森川昭廣、内山聖、原 寿郎、高橋孝雄(編) 標準小児科学第 7版 医学書院 2009
4. 五十嵐隆(編) 小児科学(第9版) 文光堂 2004
5. 柳澤正義、阿部敏明、多田裕(編) Text 小児科学 南山堂 1996
6. 飯沼一字、有阪 治、竹村 司、渡辺 博(編) 小児科学、新生児学テキスト (改訂第5版) 診断と治療社 2007
7. 清野佳紀、小林邦彦、原田研介、桃井真里子編 New小児科学(改訂第2版) 南江堂 2003  
(Nankodo's Essential Well-Advanced Series)

参考書:

1. 加藤裕久(主編集) 満留昭久、原 寿郎(副編集) ベッドサイドの小児の診かた (第2版) 南山堂 2001
2. RE Behrman, RM Kliegman, HB Jenson Nelson Textbook of Pediatrics 18th ed W. B. Saunders 2007
3. 小林登(総監修) 小児医学の進歩 89-92 (全10冊) 中山書庖 1989-1992
4. 前川喜平 写真でみる乳児検診の神経学的 南山堂 2003

	チェック法(第7版)		
5. 仁志田博司	新生児学入門 第3版	医学書院	2003
6. 鈴木康之(編)	よくわかる病態 15 小児疾患2008	日本医事新報社	2008
7. 浅井利夫、赤坂徹(編著)	医学生のための小児科学写真集	中外医学社	2004
8. 楠智一、北川照男、 松田一郎、草川三治、 奥山和男(編)	必修小児科学アトラス	南江堂	2002
9. CD Rudolph, AM Rudolph (ed)	Rudolph's Pediatrics. 21th ed.	McGraw -Hill	2002
10. H. Taeusch (eds.)	Avery' S Diseases of The Newborn 8th ed.	W. B. Saunders	2004
11. Hathaway	Current Pediatric Diagnosis & Treatment 16th ed.	Appleton & Century Crofts	2002
12. RD Eden et al (ed.)	Assessment & care of the fetus :Physiological,clinical	Appleton & Lange	1992
13. 田村正徳(編)	日本版救急蘇生ガイドライン2010	メジカルビュー社	2010
14. Richard J. Martin MB FRACP他	Fanaroff and Martin' s Neonatal- Perinatal Medicine:Diseases of the Fetus and Infants (第9版)	Mosby	2010
15. Jack S. Remington MD他	Infectious Diseases of the Fetus	Saunders	2005

## [加齢と老化、臨終]

科目責任者：佐倉 宏（東医療センター内科）

すべての生物は加齢・老化が起こり、最終的に死を迎える。まず、そのメカニズムについて、分子レベル、細胞レベル、臓器レベルで学習する。また、中年期以降にヒトの体はどのような老化に伴う生理的変化が出現していくのか、全身的な立場から理解を深める。ついで、高齢者に特有な疾患、高齢者を診療する上での基本的な技能・態度、リハビリテーションと介護を含む治療について学ぶ。本邦では他国に先駆けて超高齢社会が到来する。そこではどのような問題が生じ、医療および社会はどのように対応すべきか理解を深め、自分自身でも考えることは重要なテーマである。

(評価方法)

筆記試験。

大項目	中項目	小項目	備考
I. 総論	1 加齢・老化の基礎 2 加齢に伴う体の変化 3 成人病学 4 老年病学 5 老年社会学		
II. 加齢・老化の生物学	1 加齢の分子生物学 2 細胞の老化 3 組織の老化 4 臓器の老化	1) 遺伝子 2) 老廃物  1) 分裂寿命 2) 細胞死  1) 細胞数の減少 2) 組織の委縮 3) 組織の機能低下  1) 生理調節機能 2) 臓器の変化	テロメア、突然変異 アミロイド、リポフスチン  アポトーシス
III. 加齢・老化の臨床	1 加齢の生理的特徴 2 高齢者の心理的特徴	1) 予備力・適応能力の低下 2) 検査値の加齢変化  1) 認知機能の低下 2) 感情・意欲・性格の変化	

大項目	中項目	小項目	備考
IV. 高齢者の診察と評価	3 中年期以降起こりやすい疾患	3) 行動の変化	危険因子 閉経 うつ病  誤嚥、転倒、失禁、褥瘡
		1) 癌	
	4 高齢者疾患の特徴	2) 動脈硬化性疾患	
		3) 更年期障害	
		4) 精神疾患	
		1) 非定型症状	
	1 高齢者の診察	2) 他疾患合併	
		3) 老年症候群	
	2 高齢者総合機能評価<CGA>	4) 日常生活障害	
		1) 診察時の注意	
2) 既往歴・合併症の評価			
1) 日常生活動作<ADL>			
2) 認知機能			
3) 気分・意欲			
4) 運動機能			
5) 嚥下障害			
3 要介護認定	6) 排尿機能		
	7) 生活環境		
4 寿命	8) 介護の必要度		
	1) 介護保険主治医意見書、		
V. 高齢者の基本的治療	1 高齢者の食事・栄養療法	2) 介護サービスプラン<ケアプラン>	
		余命への配慮	
	2 高齢者の薬物療法	1) 栄養状態の評価	
		2) 栄養マネジメント<栄養管理>	
		1) 薬物動態学	
		2) 薬物力学	
3) 薬物有害作用			
4) 薬物処方上の留意点			

大項目	中項目	小項目	備考	
VI・高齢者の 医学各論	4 在宅医療と介護	2) 種類と適応、リハビリテーション処方		
		3) 認知リハビリテーション		
		1) 環境整備		
		2) 患者・家族の心理		
		3) 医療・福祉と介護の連携		
	5 療養病床	4) 在宅酸素療法、在宅栄養療法		
		5) 在宅での看取り		
		1) 急性期病床		
	1 精神・神経疾患	2) リハビリテーション病床		
		3) 介護療養型医療施設、療養型病床		
		1) 老年期うつ病		自殺
		2) せん妄		アルツハイマー病、 脳血管性認知症、 レビー小体病
		3) 脳血管障害		
	4) 認知症			
	5) パーキンソン病			
	2 呼吸器疾患	1) 肺感染症		
		2) 肺癌		
		3) 慢性閉塞性肺疾患		
	3 循環器疾患	1) 虚血性心疾患		心筋梗塞、狭心症
		2) うっ血性心不全		
		3) 不整脈		
		4) 弁膜症		
		5) 高血圧、低血圧		
		6) 動脈硬化、末梢動脈疾患		
4 消化器疾患	1) 腫瘍性疾患			
	2) 肝硬変			
5 腎・泌尿器・生殖器 疾患	1) 腎不全と水電解質異常			
	2) 排尿障害			
	3) 前立腺疾患			
	4) 骨盤底機能低下、婦人科疾患			
6 内分泌・代謝疾患	1) 糖尿病			

大項目	中項目	小項目	備考	
VII. 高齢者保健	7 骨・運動器疾患	2) 甲状腺疾患	悪性リンパ腫、骨髄異形成症候群、多発性骨髄腫、白血病	
		3) 脂質代謝異常		
	8 血液疾患	1) 骨粗鬆症、骨折		加齢黄斑変性 老人性難聴 予防、評価、治療 口腔ケア
		2) 変形性骨関節疾患		
	9 感染症・免疫・膠原病	1) 貧血		
		2) 腫瘍性疾患		
	10 感覚器疾患	1) 高齢者の感染症		
		2) 関節リウマチ、その他の膠原病		
		1) 2) 老人性白内障、その他の視覚障害		
	11 皮膚・口腔疾患	2) 聴力障害		
		3) 味覚障害		
		1) 老人性角化症、老人性紫斑		
2) 掻痒症、帯状疱疹、薬疹				
12 外科疾患・周術期	3) 褥瘡			
	4) 歯周病			
	1) 高齢者の外科的疾患の特徴			
1 現状と動向	2) 術前・術後の管理			
	3) 高齢者麻酔			
2 高齢者の健康保持・増進	1) 高齢者の人口・死因・受療率・有訴率			
	2) 超高齢化社会			
	3) 要介護の原因			
	1) 加齢と健康状態			
	2) 日常生活動作<ADL>			
3 超高齢社会の医療対策	3) QOL<生活の質>			
	4) 閉じこもり、廃用症候群			
	5) 介護予防			
	1) 地域包括ケア			

大項目	中項目	小項目	備考	
VIII. 在宅介護、 在宅医療	1 在宅医療	2) 総合診療専門医		
		1) 在宅		
			2) 往診	
	2 訪問看護	訪問看護ステーション		
	3 在宅介護	1) 訪問介護		
		2) 通所介護<デイサービス.>		
	4 在宅リハビリテーション	1) 訪問リハビリテーション		
		2) 通所リハビリテーション<デイケア>		
	5 介護保険施設	1) 介護老人福祉施設<特別養護老人ホーム>		
	6 居住サービス	2) 介護老人保健施設、		
1) ショートステイ				
7 居宅介護支援事業所	2) グループホーム			
	介護支援専門員<ケアマネージャー>			
8 地域包括支援センター				
	9 医療安全支援センター			
IX. 保健・医療・福祉・ 介護関連 法規	1 成人・高齢者保健	1) 高齢者の医療の確保に関する法律<高齢者医療確保法>		
		2) 高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律		
	2 社会福祉・介護	1) 老人福祉法		
		2) 介護保険法		

- |                 |   |         |      |
|-----------------|---|---------|------|
| 1. 鳥羽研二(編著)     | 高齢者の生活機能の総合的評価                          | 新興医学出版社 | 2010 |
| 2. 葛谷雅文、秋下雅弘(編) | ベッドサイドの高齢者の診かた                          | 南山堂     | 2008 |
|                 | Bedside learnings in geriatric medicine |         |      |

- |                                  |   |            |      |
|----------------------------------|---|------------|------|
| 3. 大内尉義、秋山弘子(編集代表)<br>折茂 肇(編集顧問) | 新老年学 第3版  | 東京医学出版社    | 2010 |
| 4. 林 泰史、大内尉義、<br>上島国利、鳥羽研二 (監・編) | 高齢者診療マニュアル  | 日本医師会      | 2009 |
| 5. 小樽利男(著)                       | 老年医学と老年学：<br>老・病・死を考える                                  | ライフ・サイエンス  | 2009 |
| 6. 日本老年精神医学会(編)                  | 老年精神医学講座(改訂)  | ワールドプランニング | 2009 |
| 7. 日本認知症学会(編)                    | 認知症テキストブック  | 中外医学社      | 2008 |
| 8. 日本老年医学会(編)                    | 老年医学テキスト (改訂第3版)  | メジカルビュー社   | 2008 |
| 9. 飯島 節、鳥羽研二(編)                  | 老年学テキスト   | 南江堂        | 2006 |
| 10. 川畑信也(著)                      | 物忘れ外来ハンドブック：<br>アルツハイマー病の診断・治療・介護                       | 中外医学社      | 2006 |
| 11. 鳥羽研二(編)                      | 高齢者への包括的アプローチと<br>リハビリテーション                             | メジカルビュー社   | 2006 |
| 12. 井藤英喜(編)                      | 高齢者に多い疾患の診療の実態  | メジカルビュー社   | 2006 |
| 13. 平井俊策(編著)                     | 新・老化学   | ワールドプランニング | 2005 |
| 14. 岩本俊彦(著)                      | 臨床老年医学  | ライフ・サイエンス  | 2006 |
| 15. 川畑信也(著)                      | 認知症疾患の診断と治療の実態：<br>「もの忘れ外来」レポート：<br>すべての臨床医のための実践的アドバイス | ワールドプランニング | 2005 |
| 16. 日本老年医学会(編)                   | 高齢者の安全な薬物療法ガイドライン                                       | メジカルビュー社   | 2005 |

# 縦断教育科目

## [人間関係教育]

科目責任者：齋藤加代子（遺伝子医療センター）

### 教育理念

本学は百年余に亘り、医学の知識・技能の修得の上に「至誠と愛」を実践する女性医師の育成を行ってきた。医学の進歩の一方で、患者の抱える問題を包括して解決する医学・医療の必要性が重視されている。今後さらに心の重要性が問われることは必定である。医師は温かい心をもって医療に臨み、患者だけでなく家族・医療チームとも心を通わせ問題を解決していく資質を高めなくてはならない。「人間関係教育」では、全人的医人を育成するために、体験の中から感性を磨き、他者・患者と共感できる能力・態度を修得する教育を行う。

具体的には人間関係教育の理念には下記のような5本の柱がある。各講義・ワークショップ、実習はこの5本の柱の下に構成されている。

### 【5本の柱】

- (1) 専門職としての態度、マナー、コミュニケーション能力（患者を理解する力、支持する力、意志を通わす力、患者医師関係）
- (2) 専門職としての使命感（医学と社会に奉仕する力）
- (3) 医療におけるリーダーシップ・パートナーシップ
- (4) 医療人としての倫理—解釈と判断（法と倫理に基づく実践力）
- (5) 女性医師のキャリア・ライフサイクル（医師として、女性医師として生涯研鑽する姿勢）

### 評価方法

出席および、各講義・WS・実習における小テスト、提出物、自己診断カードなどを総合して評価する。やむを得ない欠席の場合は、届け出ること。

## 東京女子医科大学医学部 人間関係教育到達目標

医学生の人間関係（態度・習慣・マナー・コミュニケーションおよび人間関係に関連する技能）の到達目標を示す。

卒前教育の中で卒後の目標として俯瞰すべき到達目標は、\*印を付して示す。

到達目標の概略（構造）を以下に示す。次ページに示すのが全文で、具体的到達目標が述べられている。

### 概略（構造）

- I 習慣・マナー・こころ
  - A 人として・医学生として
    - 1. 人間性
    - 2. 態度
    - 3. 人間関係
    - 4. 一般社会・科学に於ける倫理
  - B 医師（医人）として
    - 1. 医人としての人間性
    - 2. 医人としての態度
    - 3. 医人としての人間関係
    - 4. 医療の実践における倫理
    - 5. 女性医師の資質
- II 技能・工夫・努力
  - A 人と人との信頼
    - 1. 人としての基本的コミュニケーション
    - 2. 医人としての基本的コミュニケーション
    - 3. 医療面接におけるコミュニケーション
    - 4. 身体診察・検査におけるコミュニケーション
    - 5. 医療における説明・情報提供
  - B 信頼できる情報の発信と交換
    - 1. 診療情報
    - 2. 医療安全管理

## 人間関係教育到達目標全文

### I 習慣・マナー・こころ

#### A 人として・医学生として

##### 1. 人間性

(自分)

- 1) 生きていることの意味・ありがたさを表現できる。
- 2) 人生における今の自分の立場を認識できる。
- 3) 自分の特性や価値観を認識し伸ばすことができる。

(他者の受け入れ)

- 4) 他の人の話を聴き理解することができる。
- 5) 他の人の特性や価値観を受け入れることができる。
- 6) 他の人の喜びや苦しみを理解できる。
- 7) 温かいこころをもって人に接することができる。
- 8) 人の死の意味を理解できる。

(自分と周囲との調和)

- 9) 自分の振る舞い・言動の他者への影響を考慮することができる。
- 10) 他の人に適切な共感的態度が取れる。
- 11) 他の人と心を開いて話し合うことができる。
- 12) 他人の痛み・悲しみを癒すよう行動できる。
- 13) 他の人に役立つことを実践することができる。

##### 2. 態度

(人・社会人として)

- 14) 場に即した礼儀作法で振舞える。
- 15) 自分の行動に適切な自己評価ができ、改善のための具体的方策を立てることができる。
- 16) 自分の振る舞いに示唆・注意を受けたとき、受け入れることができる。
- 17) 自分の考えを論理的に整理し、分かりやすく表現し主張できる。
- 18) 話し合いにより相反する意見に対処し、解決することができる。

(医学を学ぶものとして)

- 19) 人間に関して興味と関心を持てる。
- 20) 自然現象・科学に興味と好奇心を持てる。
- 21) 学習目的・学習方法・評価法を認識して学習できる。
- 22) 動機・目標を持って自己研鑽できる。
- 23) 要点を踏まえて他の人に説明できる。
- 24) 社会に奉仕・貢献する姿勢を示すことができる。

##### 3. 人間関係

(人・社会人として)

- 25) 人間関係の大切さを認識し、積極的に対話ができる。
- 26) 学生生活・社会において良好な人間関係を築くことができる。
- 27) 信頼に基づく人間関係を確立できる。
- 28) 対立する考えの中で冷静に振舞える。

(医学を学ぶものとして)

- 29) 共通の目的を達成するために協調できる。
- 30) 対立する考えの中で歩み寄ることができる。

##### 4. 一般社会・科学に於ける倫理

(社会倫理)

- 31) 社会人としての常識・マナーを理解し実践できる。
- 32) 法を遵守する意義について説明できる。
- 33) 自分の行動の倫理性について評価できる。
- 34) 自分の行動を倫理的に律することができる。
- 35) 個人情報保護を実践できる。
- 36) 他の人・社会の倫理性について評価できる。

(科学倫理)

- 37) 科学研究の重要性と問題点を倫理面から考え評価できる。
- 38) 科学研究上の倫理を説明し実践できる。
- 39) 動物を用いた実習・研究の倫理を説明し実践できる。
- 40) 個々の科学研究の倫理性について評価できる。

B 医師（医人）として

1. 医人としての人間性

(自己)

- 1) 健康と病気概念を説明できる。
- 2) 医療・公衆衛生における医師の役割を説明できる。
- 3) 自己の医の実践のロールモデルを挙げることができる。
- 4) 患者／家族のニーズを説明できる。
- 5) 生の喜びを感じることができる。
- 6) 誕生の喜びを感じることができる。
- 7) 死を含む **Bad news** の受容過程を説明できる。
- 8) 個人・宗教・民族間の死生観・価値観の違いを理解できる。

(患者・家族)

- 9) 診療を受ける患者の心理を理解できる。
- 10) 患者医師関係の特殊性について説明できる。
- 11) 患者の個人的、社会的背景が異なってもわけへだてなく対応できる。
- 12) 医師には能力と環境により診断と治療の限界があることを認識して医療を実践できる。
- 13) 病者を癒すことの喜びを感じることができる。
- 14) 家族の絆を理解できる。
- 15) 親が子供を思う気持ちが理解できる。
- 16) 死を含む **Bad news** を受けた患者・家族の心理を理解できる。
- 17) 患者を見捨てない気持ちを維持できる。

(チーム医療、社会)

- 18) 医行為は社会に説明されるものであることを理解できる。
- 19) 医の実践が、さまざまな社会現象（国際情勢・自然災害・社会の風潮など）のなかで行われることを理解できる。

2. 医人としての態度

(自己)

- 1) 医療行為が患者と医師の契約的な関係に基づいていることを説明できる。
- 2) 臨床能力を構成する要素を説明できる。
- 3) チーム医療を説明できる。
- 4) 患者の自己決定権を説明できる。
- 5) 患者による医療の評価の重要性を説明できる。
- 6) 多様な価値観を理解することができる。

(患者・家族)

- 7) 傾聴することができる。
- 8) 共感を持って接することができる。
- 9) 自己決定を支援することができる。
- 10) 心理的社会的背景を把握し、抱える問題点を抽出・整理できる。(Narrative-based medicine, NBM)
- 11) 患者から学ぶことができる。
- 12) 患者の人権と尊厳を守りながら診療を行える。
- 13) 終末期の患者の自己決定権を理解することができる。\*
- 14) 患者が自己決定権を行使できない場合を判断できる。
- 15) 患者満足度を判断しながら医療を行える。\*

(チーム医療、社会)

- 16) 医療チームの一員として医療を行える。
- 17) 必要に応じて医療チームを主導できる。\*
- 18) クリニカル・パスを説明できる。
- 19) 医療行為を評価しチーム内の他者に示唆できる。\*
- 20) トリアージが実践できる。
- 21) 不測の状況・事故の際の適切な態度を説明できる。
- 22) 事故・医療ミスがおきたときに適切な行動をとることができる。\*
- 23) 社会的な奉仕の気持ちを持つことができる。
- 24) 特殊な状況(僻地、国際医療)、困難な環境(災害、戦争、テロ)でチーム医療を実践できる。\*

### 3. 医人としての人間関係

(自己)

- 1) 患者医師関係の歴史的変遷を概説できる。
- 2) 患者とのラポールについて説明できる。
- 3) 医療チームにおける共(協)働(コラボレーション)について説明できる。

(患者・家族)

- 4) 医療におけるラポールの形成ができる。
- 5) 患者や家族と信頼関係を築くことができる。
- 6) 患者解釈モデルを実践できる。

(チーム医療、社会)

- 7) 患者医師関係を評価できる。
- 8) 医療チームメンバーの役割を理解して医療を行うことができる。
- 9) 360度評価を実践できる。\*

### 4. 医療の実践における倫理

(自己)

- 1) 医の倫理について概説し、基本的な規範を説明できる。
- 2) 患者の基本的権利について説明できる。
- 3) 患者の個人情報を守秘することができる。
- 4) 生命倫理について概説できる。
- 5) 生命倫理の歴史的変遷を概説できる。
- 6) 臨床研究の倫理を説明できる。

(患者・家族)

- 7) 医学的適応・患者の希望・QOL・患者背景を考慮した臨床判断を実践できる。
- 8) 事前指示・DNR 指示に配慮した臨床判断を実践できる。\*

(チーム医療、社会)

- 9) 自分の持つ理念と医療倫理・生命倫理・社会倫理との矛盾を認識できる。
- 10) 自己が行った医療の倫理的配慮を社会に説明できる。
- 11) 臨床研究の倫理に基づく臨床試験を計画・実施できる。\*
- 12) 医療および臨床試験の倫理を評価できる。\*

#### 5. 女性医師の資質・特徴

(自己)

- 1) 東京女子医科大学創立の精神を述べるができる。
- 2) 女性と男性の心理・社会的相違点を説明できる。
- 3) 女性のライフ・サイクルの特徴を説明できる。
- 4) 女性のライフ・サイクルのなかで医師のキャリア開発を計画できる。

(患者・家族)

- 5) 同性の医師に診療を受けることの女性の気持ちを理解する。
- 6) 異性の医師の診療を受ける患者心理（恐怖心・羞恥心・葛藤）を説明できる。
- 7) 女性が同性の患者教育をする意義を説明できる。

(チーム医療、社会)

- 8) 保健・公衆衛生における女性の役割を述べるができる。
- 9) 女性組織のなかでリーダーシップ・パートナーシップをとることができる。
- 10) 男女混合組織の中でリーダーシップ・パートナーシップをとることができる。
- 11) 女性医師としての保健・公衆衛生の役割を実践できる。\*

## II 技能・工夫・努力

### A 人と人との信頼

#### 1. 人としての基本的コミュニケーション

(自己表現)

- 1) 挨拶、自己紹介ができる。
- 2) コミュニケーションの概念・技能（スキル）を説明できる。
- 3) 言語的、準言語的、および非言語的コミュニケーションについて説明できる。
- 4) 自分の考え、意見、気持ちを話すことができる。
- 5) 様々な情報交換の手段（文書・電話・eメールなど）の特性を理解し適切に活用ができる。

(対同僚・友人・教員)

- 6) 年齢・職業など立場の異なる人と適切な会話ができる。
- 7) 相手の考え、意見、気持ちを聞くことができる。
- 8) 同僚に正確に情報を伝達できる。
- 9) 他の人からの情報を、第3者に説明することができる。

#### 2. 医人として基本的コミュニケーション

(対患者・家族)

- 1) 患者に分かりやすい言葉で説明できる。
- 2) 患者と話すときに非言語的コミュニケーション能力を活用できる。
- 3) 患者の状態・気持ちに合わせた対話が行える。
- 4) 患者の非言語的コミュニケーションがわかる。
- 5) 小児・高齢の患者の話聞きくことができる。
- 6) 障害を持つ人（知的・身体的・精神的）の話聞きくことができる。
- 7) 家族の話聞きくことができる。
- 8) 患者・家族の不安を理解し拒否的反応の理由聞き出すことができる。

(対医療チーム・社会)

- 9) チーム医療のなかで、自分と相手の立場を理解して情報交換（報告、連絡、相談）ができる。
- 10) 医療連携のなかで情報交換ができる。
- 11) 救急・事故・災害時の医療連携で情報交換が行える。\*
- 12) 社会あるいは患者関係者から照会があったとき、患者の個人情報保護に配慮した適切な対応ができる。

### 3. 医療面接におけるコミュニケーション

(基本的技能)

- 1) 自己紹介を含む挨拶を励行できる。
- 2) 基本的医療面接法を具体的に説明し、実践できる。
- 3) 患者の人間性（尊厳）に配慮した医療面接が行える。
- 4) 患者の不安な気持ちに配慮した医療面接を行える。
- 5) 共感的声かけができる。
- 6) 診察終了時に、適切な送り出しの気持ちを表現できる。
- 7) 適切な環境を設定できる。

(高次的技能)

- 8) 小児の医療面接を行える。
- 9) 高齢者の医療面接を行える。
- 10) 患者とのコミュニケーションに配慮しながら診療録を記載できる。\*

### 4. 身体診察・検査におけるコミュニケーション

(基本的技能)

- 1) 身体診察・検査の必要性とそれに伴う苦痛・不快感を理解して患者と接することができる。
- 2) 身体診察・検査の目的と方法を患者に説明できる。
- 3) 説明しながら診察・検査を行うことができる。
- 4) 患者の安楽に配慮しながら診察・検査ができる。
- 5) 診察・検査結果を患者に説明できる。

(高次的技能)

- 6) 患者の抵抗感、プライバシー、羞恥心に配慮した声かけと診察・検査の実践ができる。
- 7) 検査の目的・方法・危険性について口頭で説明し、書面で同意を得ることができる。

### 5. 医療における説明・情報提供

(基本的技能)

- 1) 医療における説明義務の意味と必要性を説明できる。
- 2) インフォームド・コンセントの定義と必要性を説明できる。
- 3) 患者にとって必要な情報を整理し、分かりやすい言葉で表現できる。
- 4) 説明を行うための適切な時期、場所と機会に配慮できる。
- 5) 説明を受ける患者の心理状態や理解度について配慮できる。
- 6) 患者に診断過程の説明を行うことができる。
- 7) 患者に治療計画について説明を行い、相談して、同意を得ることができる。
- 8) 患者に医療の不確実性について説明することができる。
- 9) 患者に EBM（Evidence Based Medicine）に基づく情報を説明できる。
- 10) セカンドオピニオンの目的と意義を説明できる。

(高次的技能)

- 11) 患者の行動変容に沿った説明・情報提供ができる。

- 12) 患者の質問に適切に答え、拒否的反応にも柔軟に対応できる。
- 13) 患者の不安を理解し拒否的反応の理由を聞き出すことができる。\*
- 14) 患者の受容に配慮した Badnews の告知ができる。\*
- 15) 家族の気持ちに配慮した死亡宣告を行うことができる。\*
- 16) 家族の気持ちに配慮した脳死宣告を行うことができる。\*
- 17) 特殊な背景を持つ患者・家族への説明・情報提供ができる。\*
- 18) セカンドオピニオンを求められたときに適切に対応できる。\*
- 19) 先進医療・臓器移植について説明を行い、同意を得ることができる。\*
- 20) 臨床試験・治験の説明を行い、同意を得ることができる。\*

## B 信頼できる情報の発信と交換

### 1. 診療情報

(基本的技能)

- 1) POMR に基づく診療録を作成できる。
- 2) 診療録の開示を適切に行える。
- 3) 処方箋の正しい書き方を理解している。
- 4) 診療情報の守秘を実践できる。

(高次的技能)

- 5) 病歴要約を作成できる。
- 6) 紹介状・診療情報提供書を作成できる。
- 7) 医療連携のため適切に情報を伝達できる。
- 8) 診療情報の守秘義務が破綻する場合は説明できる。

### 2. 医療安全管理

(基本的技能)

- 1) 医療安全管理について概説できる。
- 2) 医療事故はどのような状況で起こりやすいか説明できる。
- 3) 医療安全管理に配慮した行動ができる。
- 4) 医薬品・医療機器の添付資料や安全情報を活用できる。

(高次的技能)

- 5) 医療事故発生時の対応を説明できる。
- 6) 災害発生時の医療対応を説明できる。

## 人間関係教育の概要

### 【5本の柱】

- (1) 専門職としての態度、マナー、コミュニケーション能力（患者を理解する力、支持する力、意志を通わす力、患者医師関係）
- (2) 専門職としての使命感（医学と社会に奉仕する力）
- (3) 医療におけるリーダーシップ・パートナーシップ
- (4) 医療人としての倫理—解釈と判断（法と倫理に基づく実践力）
- (5) 女性医師のキャリア・ライフサイクル（医師として、女性医師として生涯研鑽する姿勢）

S7：人間関係教育 7		5本の柱				
		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
医の原則、患者医師 関係の基礎（1） 講義・WS	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ EBM と NBM</li> <li>・ 患者医師関係の基礎・患者中心医療</li> <li>・ 緩和医療</li> <li>・ 尊厳死，脳死</li> <li>・ 彌生記念講演</li> <li>・ 女性医師シンポジウム</li> </ul>	○			○	
行事		○	○	○	○	○
医学教養						
7-I	・ 将来の選択分野，女性医師としてのライフサイクル		○	○		○
7-II	・ 大学院について	○	○		○	○
7-III	・ 専門医制度について	○	○	○		○

セグメント 8 以降へ続く

## 「人間関係教育 7：医の原則，患者医師関係の基礎(1)」

科目責任者：齋藤加代子（遺伝子医療センター）

講義担当：渡邊、仁志田、加藤、兼村、舟塚

### I. 講義

渡邊 弘美、仁志田 博司

#### EBM と NBM

医学をひと通り学び、病院臨床実習へむけての準備期間にもあたるこの時期、医学の基礎知識を大いに吸収する時であるが、「医学と医療」、「病気と病人」、「科学的根拠のみをふりかざしても解決できないこと」なども学ぶ機会としてほしい。Evidence Based Medicine (EBM) と Narrative Based Medicine (NBM) の差を考えることを切り口として、現代医学における EBM 偏重に潜む問題点に気づき、さらに NBM の考えを取り入れることにより医学が医療へと広がっていくことを学ぶ。

医者が正しいことを言えば患者が言うことを聞くだろうか？自然科学的に考えると意味がないことの中にも患者の持つ story があり、それを医療者は受け入れていかなければならない。

### II. 講義

加藤 義治

#### 患者医師関係の基礎・患者中心医療

### III. 講義：

兼村 俊範

#### 緩和医療

### IV. 講義

舟塚 真

#### 尊厳死・脳死

生命倫理の伝統的 4 原則と、近年重要視されている患者の「自己決定権」について学ぶ。これらは、インフォームド・コンセントや、終末医療における尊厳死などに反映されている。安楽死・尊厳死の定義とその歴史、医事訴訟、両者の違いなどを整理し解説する。これらの海外での法的整備状況、わが国での尊厳死の法制化問題についても言及する。脳死の定義、植物状態との違い、近年改正された臓器移植法について理解を深める。尊厳死に関して、実際の臨床例を呈示する。

到達目標

項目	中項目	小項目
I. EBM と NBM	1) 病気と病人	1) EBM 2) NBM
	2) 良好な患者・医師コミュニケーション	1) 傾聴 2) story の存在
	3) 医療の不確実性	1) 共生
II. 患者医師関係の基礎・患者中心医療		
III. 緩和医療	1) ターミナルケア 1	1) 身体的苦痛の除去 2) 精神的・社会的苦痛の除去 3) ホスピス
IV. 尊厳死・脳死	1) 医の倫理	1) 医の倫理に関する規定 2) 自己決定権
	2) 医師と患者および家族との関係	1) インフォームド・コンセント 2) 医事訴訟
	3) ターミナルケア 2	1) 安楽死問題 2) 尊厳死 3) 法的整備

## 「人間関係教育 7：医学教養 7」

科目責任者： 齋藤加代子（遺伝子医療センター）

講義担当： 学長 笠貫 宏、高桑 雄一、池田 康夫

### I. 講義 学長 笠貫 宏

将来の選択分野、女性医師としてのライフスタイル

### II. 講義 高桑 雄一

大学院について

医学部卒業後、研究者としての能力を涵養するために、本学には大学院医学研究科が設置されている。本講義では、研究マインドの重要性と大学院の意義と制度を説明するとともに研究倫理を含めて、医学研究に携わる心構えを説く。

### III. 講義 池田 康夫

専門医制度について

到達目標

大項目	中項目	小項目
I. 将来の選択分野、 女性医師としての ライフスタイル		
II. 大学院について	1. 大学院の意義 2. 本学の制度 3. 研究倫理	1) 研究能力の修得 2) 研究手法の修得 1) 医学研究科（博士課程）の専攻と分野 2) カリキュラムと単位 3) 学位（博士）の認定 4) 基礎研究医養成プログラム 1) 研究に携わる者の行動規範 2) 研究不正とその対処
III. 専門医制度について		

[参考図書]

A. デーケン 著	ユーモアは老いと死の妙薬	講談社	2002
関根 透 著	日本の医の倫理	学建書院	2001
医療倫理 Q&A 刊行会 編	医療倫理 Q&A	太陽出版	2002
鈴木利広 著	患者の権利とは何か	岩波書店	1993
森岡恭彦 著	インフォームド・コンセント	中央公論社	1995
近藤・中里 等 著	生命倫理事典	太陽出版	2002
河合隼雄 著	コンプレックス	岩波新書	1971
露山徳爾 著	人間の詩と真実その心理学的考察	中公新書	1978
諏訪茂樹 著	対人援助のためのコーチング —利用者自己決定とやる気をサポート—	中央法規出版	2007
東京女子医科大学ヒューマン・ リレーションズ委員会 編	医学生と研修医のための ヒューマン・リレーションズ学習	篠原出版新社	2003
久米昭元・長谷川典子 著	ケースで学ぶ異文化コミュニケーション 誤解・失敗・すれ違い	有斐閣	2007
日野原重明・仁木久恵 訳	平静の心 オスラー博士講演集 新訂増補版	医学書院	2003
平田オリザ 著	対話のレッスン	小学館	2001
ロクサーヌ・K. ヤング 著、 李 啓充 訳	医者が心をひらくとき — A Piece of My Mind (上) —	医学書院	2002
ロクサーヌ・K. ヤング 著、 李 啓充 訳	医者が心をひらくとき — A Piece of My Mind (下) —	医学書院	2002
加藤明彦 著	らくらく視覚障害者生活マニュアル	医歯薬出版	2003
千代案昭・黒田研二 編	学生のための医学概論	医学書院	2004
香川知晶	命は誰のものか (ディスカヴァー携書)	ディスカヴァー・ トゥエンティワン	2009
トリシャ・グリーンハル/ ブライアン・ハーウィッツ	ナラティブ・ベイスト・メディスン 臨床における物語りと対話	金剛出版	
斎藤清二/岸本寛史 著	ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践	金剛出版	2001
斎藤清二 著	ナラエビ医療学講座 —物語と科学の統合を目指して—	北大路書房	2011
野口裕二 著	物語としてのケア —ナラティブ・アプローチの世界へ—	医学書院	2002

## 〔国際コミュニケーション〕

科目責任者：遠藤 弘良（国際環境・熱帯医学）

講義担当者：鈴木 光代、遠藤 美香 他

### 到達目標

将来医療人として国際的に活躍できる人材を育成するために、英語を用いて、臨床で患者および医療者とコミュニケーションができる能力を養成する。単に、英語を話すだけでなく、異なる文化的背景を持つ人の倫理観・社会観・死生観そして専門的言語についての理解を伴うコミュニケーション能力をも開発する。さらに、言語によるコミュニケーションに必要な、読む力・書く力を合わせて教育し、国際的に全人的医療を行える人材育成を目標とする。

### セグメント7 国際コミュニケーション到達目標及び概要

セグメント7 では、セグメント6までで学んだ基礎的医学英語のスキルをより向上させ、本格的な症例サマリーが英語で書けて、それをプレゼンできるようになる英語力を身につけること到達目標とする。

また、引き続き、医学関連のトピックに関心を持ち、積極的に、英語で行われる研究会に参加するなど、英語で学ぼうという自主的な学習姿勢を維持するとともに、e-learning による医学英語の語彙学習の継続性を定着させる。

### （評価方法）

セグメント8 の国際コミュニケーションと一緒に通年で評価する。具体的には、授業への参加度、e-learning の学習状況および語彙テスト、レポートにより総合的に評価する。

大項目	中項目	小項目
I. ケースサマリーの書き方	1. patient notes の取り方 ケースサマリーの書き方	1) ケースサマリーの書き方の講義をうけ、実際に書くという演習を行う。
II. 医学英語の継続的語彙学習	1. e-learning	1) 医学英語の e-learning を継続的に行い、定期的に行われる語彙テストによって、自己の学習の達成度を見る。また、自主的に付随の Practice Test にもチャレンジし、語彙力定着を図る。
III. 英語で学ぶ医学的知識	1. 臨床医学の他、社会医学分野に関しても、英語のレクチャーを聴く  2. 英語医療面接の基礎	1) ネイティブのドクター等による英語のレクチャーを聴き、医学の知識・教養を増やすとともに、積極的に発言をして、コミュニケーション能力を高める。  2) 英語医療面接の基礎的英語表現を学ぶ。

斎藤中哉、Alan T. Lefor 著	臨床医のための症例プレゼンテーション A to Z	医学書院	2008
McCorry, L.K. & Mason, J. 著	Communication Skills for the Healthcare Professional	Lippincott Williams & Wilkins	2011
Hall, Geroge M. & Robinson, Neville 著	How to Present at Meetings	Wiley-Blackwell	2011
Kaufman, Matthew 他著	First Aid for the Medicine Clerkship	McGraw-Hill Medical	2010
Le, Tao 他著	First Aid for the Wards	McGraw-Hill Medical	2012

## 〔情報処理・統計〕

科目責任者：山口 直人（衛生学公衆衛生学（二））

### 到達目標

本講義ではセグメント 5、6 に引き続き、疫学概念と方法について学ぶ。続いて臨床疫学概念と方法を理解して、根拠に基づいた医療（EBM）を実践するための基礎的な能力を身につけることを目標とする。講義の前半では内容の説明を行い、後半では論文を読んだり、簡単な演習問題を解いてみることを通して臨床疫学の基本的な考え方を理解する。

### （評価方法）

出席、講義参加態度、レポート、筆記試験により評価する。

大項目	中項目	小項目
I. 疫学とその応用	1. 疫学研究方法の種類と特徴	1) 偶然誤差、系統誤差 2) 選択バイアス、情報バイアス 3) 交絡、交絡の調整方法 4) 因果関係の判定 5) 信頼性、妥当性
II. EBM・臨床判断の基本	1. 正確な平均値を考慮する医療	1) 疫学を利用した臨床判断 2) 疫学と臨床疫学 3) 患者アウトカム 4) 医療倫理におけるエビデンス
	2. 根拠に基づいた医療（EBM）	1) 患者問題の定型化 2) 情報収集法 3) 批判的吟味 4) 患者への適用 5) 研究デザイン 6) メタ分析（メタアナリシス） 7) 診療ガイドライン
	3. 臨床疫学的指標	1) 内的妥当性、外的妥当性 2) バイアス、交絡因子 3) アウトカム 4) 信頼区間 5) 相対危険度、寄与危険度、オッズ比 6) 検査前確率 7) 感度、特異度 8) 検査後確率 9) 尤度比 10) ROC 曲線

参考図書

- ・ 日本疫学会監修 はじめて学ぶやさしい 疫学南江堂 2010  
一疫学への招待改訂 第2版
- ・ 福井次矢監修 臨床疫学 EBM 実践のための必須知識 メディカル・サイエンス・ 2006  
インターナショナル
- ・ Gordon Guyatt 著 臨床のための EBM 入門—決定版 医学書院 2003  
JAMA ユーザーズガイド